

聖徒の道

4
1992



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1992年4月号



表紙——昨年6月、モルモンタバナクル合唱団は、ヨーロッパ中部とロシアで、歴史に残るコンサートツアーを行なった。写真は、オーストリア・ウィーンでの合唱団と独唱者のマリリン・ノリス姉妹。(本文「みたまのアンコール」p.32参照)

こどものページ表紙——

絵：シェリー・ミーデル

一般

大管長会 復活祭のメッセージ	1
大管長会メッセージ——人生は永遠である	
大管長エズラ・タフト・ベンソン	2
キリストの永遠の使命——造り主、啓示を与える者、贖い主	
ケント・P・ジャクソン	6
キリストを信じる スティーブン・E・ロビンソン	14
信仰という名の冒険 ローレンス・H・キム	25
みたまのアンコール ジェイ・M・トッド	32
「このツアーは主が望まれたものです」	42
公演地域での教会の発展状況	44
ツアー・ドキュメント	45

青少年

私の声を電波に アン・C・ブラッドショー	10
質疑応答——	
私の母はなぜ亡くならなければならなかったのですか	28

定期特別記事

家庭訪問メッセージ——み言葉を味わう	24
--------------------	----

こども

親友 ヘレン・ヒューズ・ピック	2
分かち合いの時間 聖典を読むと、敬けんになれます	
バージニア・ピアス	6
1992年4月イースター(ふっ活祭)カレンダー	
コーリス・クレートン	8
歌 主はみこをつかわし	10
おもちゃばこ	12
モルモン経物語——むすこアルマのくいあらため	13

聖徒の道

1992年4月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシントン、L・トム・ベリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、チャールズ・ディエイエ、ロバート・E・ウエルズ
編集長：レックス・D・ピネガー
教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：ブライアン・K・ケリー
編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集補佐/こどものページ：ディエーン・ウオーカー

チーフアートディレクター：M・マサト・カワサキ
アートディレクター：スコット・D・バン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック
制作：レジナルド・J・クリステンセン、ステイブ・テイトン、ジェーン・アン・ケンプ、テリーズ・カービー

工程管理：ダイアナ・バンスタブレ

配送部長：ジョイス・ハンセン

聖徒の道 1992年4月号第36巻第4号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106 東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 精興社/クロスロード

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)

半年予約 1,100円(送料共)

普通号 150円, 大会号 350円

International Magazine April 1992

ITEM 92984 300

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright © 1992 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Translated into Japanese 1992.

●定期購読は、「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎044-811-0417

The *Seito No Michi* (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to *Seito No Michi* at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

大管長会 復活祭の メッセージ

復活祭の季節を前にして、イエス・キリストが生きておられ、全人類の贖いの主、救いの主であり、神の御子であると知ることは、極めて尊い祝福です。私たちはすべての人に向かって、イエス・キリストは「道であり、真理であり、命である」(ヨハネ14:6)と宣言いたします。

最初の復活祭となった主イエス・キリストの復活は、過去、現在、未来を通じて最も栄光に満ちた、意義深い奇跡です。

復活は文字どおり現実のものであることを、私たちは証します。私たちの救いの主は、この地上に生を受けるあらゆる人々に再び肉体を得、もう一度生きるという特権を与えてくださいました。救いの主がこの地上で生活されてから2,000年近い時の隔たりがあるにもかかわらず、その教えは現代にも生きています。

私たちを導き、人生に意義をもたらしてくれる真理を、救いの主の生涯から探し求めるよう、すべての人々に心よりお勧めします。主は自らの命を捧げられ、私たちが命を得られるようにしてくださいました。私たちはこのお方を礼拝しており、すべての人々にも同様に礼拝するよう招くものです。

大管長会

エズラ・タフト・ベンソン

ゴードン・B・ヒンクレー

トーマス・S・モンソン



人生は 永遠である

大管長

エズラ・タフト・ベンソン

人生は永遠に続き、人は永遠に存在します。死すべき世に来る前、私たちは英知を有する霊として生活していました。現在のこの地上での生活も永遠の生活の一部です。誕生は始まりではなく、だれも逃れることのできない死も、終わりではありません。

永遠の存在者である私たちは、各自の内に天与のひらめきを宿しています。久しく人生経験を重ねた者として、私は天父の子供たちは本質的に善であると確信しています。人は、平和に生活したい、良き隣り人でありたいと願い、家庭と家族を愛し、より高い水準に生活を改善しようと努め、良いことを行ないたいと考えています。私は神がこのような人々を愛しておられるのを知っています。

私は神の小さな僕^{しもべ}として、至る所に住む天父の子供たちを愛する気持でいっぱいです。私はいわゆる上層階級から下層階級まで多くの人々に会いました。彼らの家や畑、農場や店を訪れ、地上に張り巡らされた様々な交通機関や飛行機の中で人々と言葉を交わしてきました。大小の様々な集会に出席し、彼らの集う教会で共に礼拝する特権に恵まれました。

愛する者を失う悲しみはだれにも訪れます。しかし、そこには感謝の念もあります。この人生が永遠であることへの感謝です。



誘惑と問題に満ち、罪深い、混乱したこの現代を生きていくとき、私たちは確実に近づく死と人生の不可思議さ、神の力と愛とを感じて、へりくだった気持ちにさせられます。愛する者を失う悲しみはだれにも訪れます。しかし、そこには感謝の念もあります。生命が永遠であることへの感謝であり、すべての人に自由に与えられている偉大な福音の計画、主イエス・キリストの生涯と教えと犠牲に対する感謝です。

主イエス・キリストの生涯とみ業を思い、神に感謝しましょう。主は死の縄目を解き、世の光、命となり、模範を示し、道を明らかにし、こう宣言されました。

「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。」(ヨハネ 11:25-26)

確かに、人生は永遠です。この偉大で基本的な真理をたとえ幾度か見失うことがあろうとも、私たちは地上の生活を終えた後も生き続けるのです。

私たちは、いずれ朽ち果てる取るに足らない物事に、執着することがよくあります。この世の宝は、言ってみれば人生という学校にいる間、教室と黒板を提供してくれるにすぎません。金、銀、家、株、土地、家畜そのほかのこの世のものに、正しい優先順位を与えるのは、私たちです。

この世の生涯は一時的なものでしかありません。私たちは、昇栄に到達するための第一の教え、つまり主の福音の計画に対する従順を学ぶためにこの世にいます。

確かに死は万人に訪れます。しかし実際は、永遠の別離という意味での死は存在しません。復活は現実に起こり、聖典にはその証拠が随所に見られます。主の栄光に満ちた復活のすぐ後で、マタイはこう記録しています。

「また墓が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた。」(マタイ 27:52-53)

霊界は遠く離れてはいません。現世と来世を隔てている幕が、非常に薄くなることがときどきあります。亡くなった愛する人々は、私たちから遠く離れた場所にいるわけではありません。

予言者ブリガム・ヤングは「一体、霊界はどこにある

のだろうか」と問うて、みずから答えています。

「霊界はこの場所にある。……(霊たちは)この組織された地球の境界を越えたかなたへ去るのだろうか。いやそうではない。彼らは永遠にわたってここに住むために、この地球に遣わされているのだ。」(「説教集」3:369)

「霊は肉体を離れると、天父のみ前に行く。そこで霊的な事柄を見聞きし理解する備えをさせられる。……もし主が許されるなら、またそれが主のみこころであれば、あなたはこの世を去った霊たちを、今あなたが肉眼で体を見るようにはっきりと、見ることができるであろう。」(「説教集」3:368)

確かに人生は永遠なのです。死は終わりではありません。墓の傍らで悲嘆に暮れ、いぶかっている婦人たちに、天使はこう告げました。「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。」(ルカ24:5-6)

「そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。」この言葉に匹敵する劇的な言葉を、歴史の中に見いだせるでしょうか。

キリスト・イエスほど地上に重大な影響を及ぼす生涯を送った人が、はたしているのでしょうか。私たちはキリストの教えを除いた人生というものを考えることができません。主がおられなければ私たちは、肉欲と物質主義に支配された恐れや暗やみから生じる迷信と崇拜に迷うことでしょう。今は私たちはイエスの示された目標とはほど遠い状態にあるかもしれませんが、決してその目標は見失ってはなりません。また、イエスの教えとその生涯、死、復活なくして、光と完成に向かって進歩するのは不可能であることを忘れてはなりません。

全地の民がイエスの教え、模範、その神性を受け入れ、全人類のために死の縄目を解いた栄えある復活を事実として受け入れる日の来ることを、神が早めさせたもうように願っています。

救い主が教えられた愛の福音を受け入れ、実践し、主のみこころを行なって初めて、私たちを縛っている無知と疑惑の縄目を断ち切ることができます。人はこれを何度も繰り返して学ばなければなりません。私たちが快い霊の喜びを今も永世にも経験するには、この明快な栄光あふれる真理を身につけなければなりません。利己心を捨て主のみこころを行なわねばなりません。生活の中で

主を第一に置く必要もあります。主の愛を隣人と分かち合うときに、確かに祝福は幾倍にも増します。

今日、幾千人もの忠実な宣教師たちがこの極めて大切なメッセージを、全世界で惜しみなく宣べ伝えていきます。イエスはキリストであり、全人類の救い主、世の贖い主、神の御子、この世の神、御父と人類の間に立つ仲保者なのです。

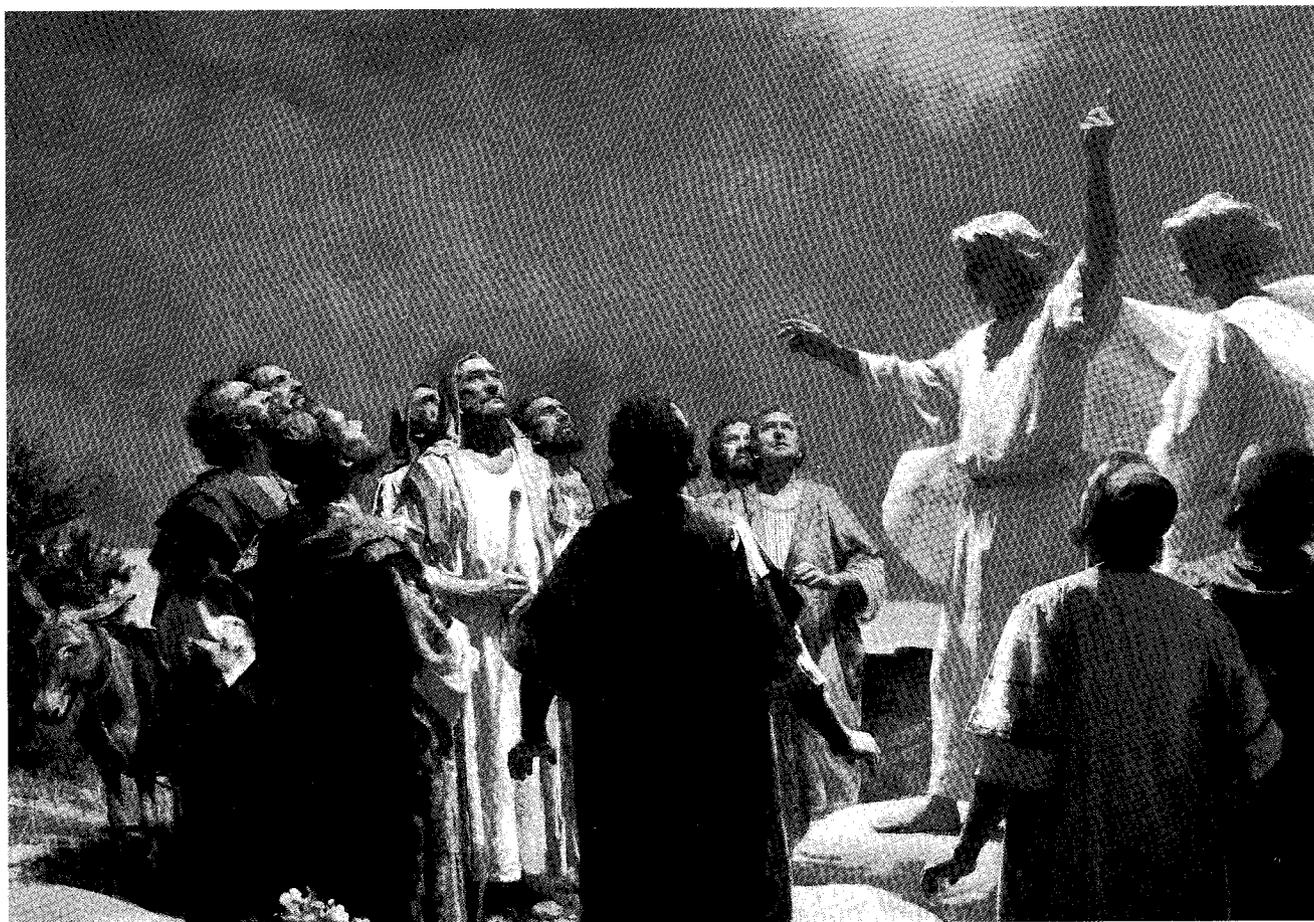
今日、真理のメッセージを携えた宣教師と末日聖徒イエス・キリスト教会の幾百万もの会員が、神が天から語られ、イエス・キリストが再び人に現われたまい、復活は事実であることを証しています。

私は、彼らの述べるメッセージが真理であることを証し、自らの厳粛な証をイエス・キリストのみ名によって付け加えるものです。□

ホームティーチャーへの提案

1. 人生は永遠であり、人は永遠の存在である。私たちは皆、自らの内に天与のひらめきを持ち、正しいことをしたいと考えている。
2. 人を助けるために、主イエス・キリストは死の縄目を断ち、従うべき道を明らかにされた。
3. 人は、いずれ朽ち果てる取るに足りない物事に執着することがよくある。
4. 主の福音を受け入れ実践して初めて、私たちを縛っている無知と疑惑の縄目を断ち切れることを、学ぶ必要がある。
5. 永遠の別離という意味での死は存在しない。復活は実際に起こる。人生は永遠である。

THE ASCENSION, BY HARRY ANDERSON



キリストの

——造り主、啓示を与える者、贖い主^{あがな}

ケント・P・ジャクソン

モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠、そして予言者ジョセフ・スミスの説教や記録は、私たちにイエス・キリストという人物、その福音の計画が要求するもの、また私たちとキリストとの関係がどのようなものであり、どうあるべきなのかを教えてください。新約、旧約両聖書に加えて、これらの末日の証も、キリストが生きておられることだけでなく、それが私たちにとってどのような意味を持っているのかを教えてください。

在世当時には同時代の人々に受け入れられず、現代の大勢の盲目な人々には必要性を認められないにもかかわらず、私たちは現世に生を受けられたイエスがただのガリラヤ出身の大工ではなかったことを知っています。この世に降誕される以前、キリストは御父のみもとで、栄光をもって世を治めておられました。アブラハムは、前世でのキリストの栄光を見て、「神の如き者」と証しました。(アブラハム3：24)パウロは、前世のキリストが「神と等しく」あったと記録しています。(ピリピ2：6)

イエスご自身も、天父に対する祈りの中で、「父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前にわたしを輝かせて下さい」(ヨハネ17：5)と言われました。「御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿」(ヘブル1：3)なのです。無数の世界を創り、統治し、予言者にみこころを伝え、神の子供たちの罪を贖うことはイエス・キリストの使命の一部でした。イエス・キリスト、すなわちエホバは、ベンジャミン王が教えたように、「無限の過去から無限の将来に亘ってまします全能の主」(モーサヤ3：5)なのです。天父は、肉体における独り子、イエス・キリストのみ手にすべての権威と権能を託されました。

キリストの役割を正しく理解するには、その広範囲にわたる永遠の使命を知る必要があります。聖典は、キリストが造り主、啓示を与える者、贖い主であると教えています。

造り主

古代の聖典も現代の聖典も、キリストが造り主であることを証しています。主はジョセフ・スミスに、次のように言われました。「主なる汝の神、すなわちイエス・キリスト、『われあり』と言いつた大いなる神、アルパにしてオメガ……われはわが言を出してこの世界を造り、またよろずのものわれによりて出で来りたる者なり。」(教義と聖約38：1、3)パウロは、「万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも……御子によって造られ、御子のために造られたのである」と述べています。(コロサイ1：16)またベンジャミン王はキリストを、「創世の時から万物を造りたもうている造り主」と呼びました。(モーサヤ3：8)

モーセは示現の中で主のみ業をかいま見、創造におけるキリストの役割をはっきりと理解しました。御父がこう言われたからです。「われわが力の言によりてこれらのものを創りたり。そのわが力の言とは、わが生みたる独子^{ひとりご}のことにして恩恵と真理とに満てる者なり。われは、無数の世界を創りたり。而して、またこれらはわれ自らの目的ありて造りしなり。而して、わが子によりてこれらの世界を創りたり。わが子とは、わが生みたる独子^{ひとりご}の事なり。」(モーセ1：32—33)

御父のみもとで、エホバは引き続きその創造物を治めておられます。イエスは「その力ある言葉をもって万物を保っておられ」(ヘブル1：3)、キリストから出る光は、「広大なる宇宙に満ち」、「すべてのものに生命を与え」、「すべてのものを支配」しています。(教義と聖約88：12—13)

古代の予言者たちが受けた啓示は、旧約聖書のエホバであるイエス・キリストから与えられた。この同じエホバが、現在の神権時代に福音の真理をジョセフ・スミスに示された。

永遠の使命



啓示を与える者

イエス・キリストはエホバであって、古代と近代におけるイスラエルの神であり、時の初めから予言者に語ってこられました。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は次のように教えました。「墮落以後に与えられた啓示はみな旧約聖書のエホバであるイエス・キリストを通して与えられたものである。聖典全体を通して神という言葉が使われている箇所、あるいは神が現われた箇所は、みなアブラハム、ノア、エノク、モーセその他すべての予言者と語られたエホバを指している。エホバはイスラエルの神、イスラエルの聖者であって、イスラエルの民をエジプトの束縛から解放して導き出し、モーセの律法を与えそれを成就した神である。」（「救いの教義」ブルース・R・マッコンキー編、第1巻、pp. 27-28）

モルモン経もこの教義を教えています。キリストは復活してアメリカ大陸を訪れたとき、このように言われました。「律法を授けたる者、またわが民なるイスラエル人と誓約を結びたる者はすなわちわれなり。」（IIIニーフアイ15：5。Iニーフアイ19：7-10；IIIニーフアイ11：14参照）

現代においても、キリストはご自身をエホバであると宣言されました。「イエス・キリスト、汝の贖い主、かの大いなる『われあり』の神……の聲に耳を傾けよ。」（教義と聖約29：1。38：1；39：1；出エジプト3：13-14参照）

贖い主

イエスの使命は、創造のみ業、様々な世界の統治、予言者と語ることだけにとどまるものではありません。キリストは神の言葉であり、天父のみこころの実行者であるために、その使命は、死すべき肉体をもって地上に下り、この世のだれよりも大きな試しを受けて、罪を犯すことなく誘惑や試練に打ち勝ち、世の罪のために苦しむことでもあったのです。家を遠く離れた馬小屋で、貧しい家族の一員として生まれたその卑しい境遇のために、キリストが地上に送られてきた目的や、神としての性質は覆い隠されてしまいました。しかし、キリストの使命は、そうした低い身分にあつてのみ果たすことができたのであり、よろずの物の下にまで身を落とす必要があったのです。（教義と聖約88：5-6参照）パウロは、キリ

ストの慈しみ深いみこころをよく理解していました。「〔キリストは〕おのれをむなしくして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして……。」（ピリピ2：7-8）キリストは地上に来られたとき、まさにその栄光を捨てられたのです。そして、私たちの生活により近づくために、人間と同じ死すべき肉体を得られたのです。

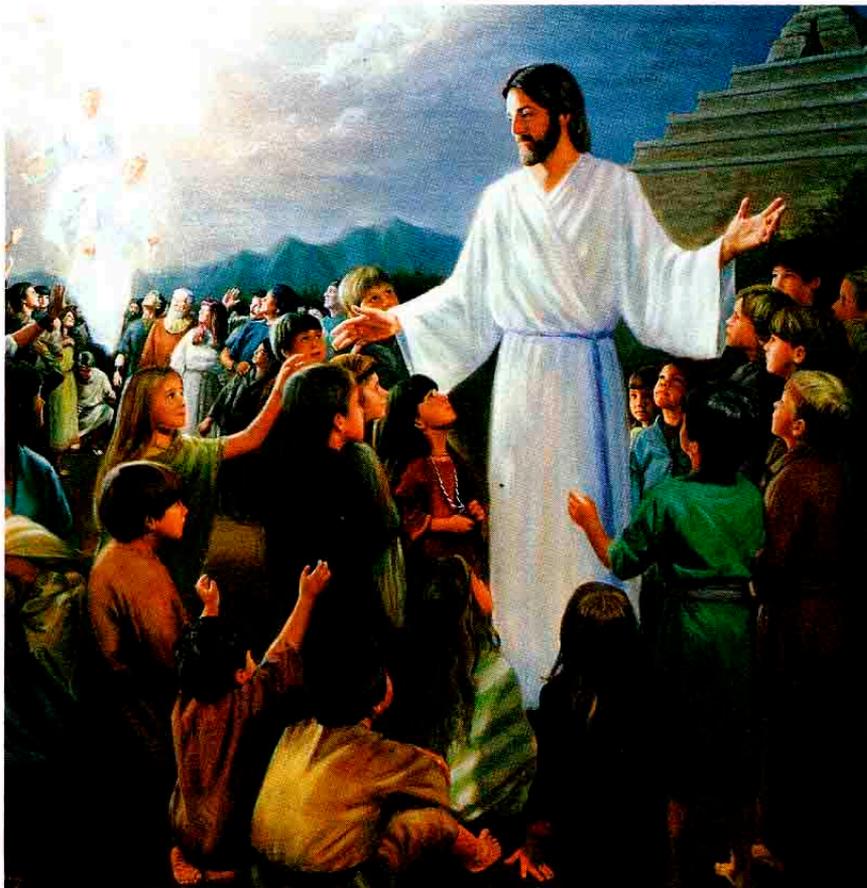
「そこで、イエスは、神のみまえにあわれみ深い忠実な大祭司となつて、民の罪をあがなうために、あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった。主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである。

この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。」（ヘブル2：17-18；4：15）

キリストがその天のみ座から降りて人間として生活された理由のひとつは、私たちに従うべき模範を示すためでした。戒めを守り、この世の誘惑や試練に打ち勝つことができることを、身をもって示されたのです。誘惑や試しに遭った人々、人生の悲しみを経験した何百万人もの人々にとって、自分たち以上の苦しみや悲しみを味わった人がいるという事実を知るのには、計り知れない価値のあることです。イエスはみずから逆境に打ち勝たれたばかりでなく、それを乗り越えようとして苦しんでいる人に、憐れみを与えてくださるのです。

しかし、キリストの生涯は単に模範を示す以上の意味を持っていました。それは、贖罪という、人の理解を超えた苦しみを伴っていたのです。「見よ、われは神なるに、人もし悔い改むるならばこの苦しみを受けざらんがために、すべての者に代りてこの苦しみをわが身に受けたり」（教義と聖約19：16）と、主は言われました。これは、人類に対するキリストの比類ない恵みを示すために行なわれたことなのです。私たちがのために味わわれたイエスの苦しみに思いをはせるとき、キリストがどんなお方なのかを忘れてはなりません。それは全能の神ご自身であり、栄光の位から降りて、死すべき肉体を受け、私たちのために苦しみ、死なれたお方なのです。

イエスの贖いは、最高の犠牲と奉仕であると同時に、また偉大な勝利でもありました。この至上の愛の働きを遂行されたイエスは、すべての者に真の偉大さとはどのような意味かを示されました。贖いの業によって、この



王の王

すべての者のうち、最も大いなる者であるイエスが、あらゆるものの下に身を落とされたのは、ご自身の栄光の場所へ人々を共に連れ帰るためでした。

イエスは事実、その栄光の場所へ帰って行かれました。この地上で神の小羊(ヨハネ1:29参照)と呼ばれたイエスは、今や永遠に王の王であり、主の主(黙示19:16参照)なのです。しかし、イエスは栄光を受けられて、そのみ業を終えられたわけではありません。私たちがまだ主のみもとに帰っていないからです。キリストの永遠の使命は、天父と同じく、人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすことなのです。(モーセ1:39参照)

キリストの福音の計画によって、

私たちは神の属性に似た特質を身につけることができます。また、主のみこころに従うことによって、弱点を克服し、神のようになることができます。しかし、いつの時代でも、私たちの救いに最も必要なのは「神の恵み」なのです。

イエスの失われた羊のたとえ話(ルカ15:1-7参照)から、キリストの愛の深さをかいま見ることができるでしょう。喜んですぐに従う人もいれば、今しばらく時間と愛、神の羊飼いの励ましを必要とする人もいます。キリストが、私たちの救いのためにどのようなことも惜しまれないことは、その贖いの苦しみからもよくわかります。キリストに従う道を選んだ一人一人を救うためにあらゆる努力が尽くされるまで、み業が終わりを告げることはありません。キリストのみ声に耳を傾け、キリストに従うためにこの世のものを捨てる人々は、やがて次の約束が真実であることを知るでしょう。「わたしの父の家には、すまいがたくさんある。……あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。」(ヨハネ14:2)□

*ケント・P・ジャクソン兄弟——ブリガム・ヤング大学古代聖典学部教授。

世的な偉大さについての空虚な誤った考えや、社会的地位とそれにまつわるもろもろの事柄に固執する態度の愚かさがわかります。真の価値はすべてキリストの模範に照らして定めなければなりません。この世の物差しで本当の価値が計れることはめったになく、むしろゆがめてしまうことが多いのです。

ヤコブとヨハネが母親と一緒に主を訪れて、来るべき世における地位を望んだとき、イエスは、そうした世の考えが間違っていることを、やさしく諭されました。彼らは、真の偉大さが地位からではなく、奉仕から生まれることを学んだのです。

「あなたがたの知っているとおおり、異邦人の支配者たちはその民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。あなたがたの間ではそうであってはならない。かえて、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない。それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである。」(マタイ20:25-28)



私の声を電波に

アン・C・ブラッドショー

「こんにちは。ホールトン放送のジェニーです。ご機嫌いかがですか。きょうも皆さんに楽しいひとときをお届けします。まずは音楽をどうぞ。」

イギリスのランコーンにあるホールトン総合病院のラジオから、毎週数時間、17歳のディスクジョッキー、ジェニー・アイルランドの陽気な声が聞こえてきます。

ジェニーはラジオの電波に乗せて、励ましと希望を病院の患者たちのもとに届けています。しかし、彼女が複雑なラジオ機材を、腕のない手で操作していることを知る人は、あまりいません。

ジェニーが生まれたとき、父親はジェニーの肩に手首から先しか付いていないのを見て、嘆きました。「ああ、こんなかわいい娘に、抱き締めてもらえないなんて。」

今、彼はこう言います。「そんなふうに思ったのはあのときだけでした。ジェニーは全身で抱いてくれます。申し分なく心の温かい子に育ってくれました。」

人々に対する愛は、生活のあらゆる面でジェニーの原動力となっています。「みんなと友達になりたいんです。一番の目標は、自分のラジオ番組を持って、一般の人に放送すること。そうしたら、大勢の人の心に触れられますから。」

今までにも、ジェニーは人々の心に触れてきました。越えられない障害は何もありません。ジェニーは国の健康優良賞を受けるために必要とされる運動資格をすでに満たしていて、級友たちのすばらしい模範となっています。ウェールズのスノードニアで行なわれた最終の長距離ハイクは過酷なものでした。方位磁石と地図だけを頼りに、天候を問わず、何日も山中を旅するのです。ジェニーは片方のひざの靭帯も欠けているので、苦勞しました。しかし彼女は、固い決意をもってやりぬきました。

ジェニーの社交性は、イエス・キリストの福音についての強い証をいろいろな人に伝えるのに役立っています。臆することがないのです。

ジェニーは、自分の障害を見て当惑

する人たちにさえ、特別なものを感じさせる方法を知っています。

「ときどき、子供たちが私を指差して、こそこそ話をしたり、からかったりします。でもそれが、本当に少しも苦にならないんです。笑い返すだけです。腕がなくても、問題はありません。自分を信じさえすれば、普通の人と同じことができます。」

私がこんなふうにも生まれたことについて、医学的な説明はありませんでした。だれのせいでもありません。私はセミナーで、自分についてたくさんを学びました。自分にはなすべきことがある、障害は試練ではなくて、何かの形でほかの人を助けるためのものだと感じています。障害のおかげで私は随分強くなって、忍耐強い人間になりましたし、家族とのきずなも強まりました。」

ジェニーには、15歳の弟ジェレドと、13歳のマクシン、9歳のカースティーという妹がいます。

ジェニーは笑いながら言います。「勘弁してもらってるのはたったひとつ、お皿洗いです。だって、ちょっと



ぬれてしまいますから。いえ、ちょっとじゃなく、びしょりですね。けど、ジェレドと同様、お料理は大好きで、手助けはまったく要りません。」

彼女は自分の姿をビデオで見たことがあり、見た人がどのように感じるかを理解しています。「第一印象は、『手助けが必要だ。随分ぎこちない』と感じました。でも、自分でやっているときは、不器用だなんて感じていません。必要なことをしているというだけなんです。」

ジェニーは正直にこう言います。「落ち込んで、自分が惨めになる日だって、もちろんありますよ。でも、私の一番の親友は天のお父様で、必要なときにはいつでもそばにいてくださると、両親が教えてくれました。」

小学校のときのことを思い出します。字を書くのがほかの子たちよりずっと遅かったのです。先生が読んで、それ

を書き取るのですが、私はついていけなくて、家に帰ってきて泣きました。そのとき母が、『天のお父様をお願いしてごらん』と言ったのです。

それで、初めのうちは助けていただけないように感じていましたが、何週間かたつと、できるようになっていました。それからは、ついていけたのはもちろん、ほかの子より速いときもありました。」

こんな思い出も話してくれました。「もっと小さかったときのことです。手が届かず、靴下をはけませんでした。それでそこに座り込んで、はけるまで何時間も頑張りました。」

学校生活を通してジェニーには様々な課題が与えられてきました。しかし、教会のプログラムや愛にあふれた両親と指導者が培ってくれた自尊心のおかげで、ジェニーは何にも臆することなく成長を続けています。

ジェニーは笑顔でこう語ります。「学校のスピーチ・コンテストのときでした。好きなテーマで話すことになって、私は教会という題を選びました。私が『教会は楽しいです』と言うと、みんなはびっくりしていました。質問の時間に、だれから『本当に、毎朝6時に起きてセミナーに行くんですか』と聞かれました。最後に先生が、『教会のすばらしい宣伝になりましたね』とひとこと言ってくれました。」

ジェニーの話は続きます。「こんなこともありました。健康優良賞のための歩行種目で荷物を背負わなければならないとき、ひどく重たく感じて、あきらめそうになりました。いつもなら、そんな大きなチャレンジの前は父に祝福を頼んでいたのに、その日に限っては忘れていたことに気づきました。母に迎えを頼もうと電話機を探そうとした、まさにそのときでした。祝福師



ジェニーと、
ジェニーの監督でもある父親。
後ろに見えているのは、
自宅近くの川にかかる
世界最大の固定アーチ式のつり橋。
将来はラジオ放送の仕事を
したいと言うジェニー。
父アーサー、母イレーン、
弟ジェレド、妹のマクシンと
カースティーと共に。(下段右)



の祝福の一節が頭に浮かんだのです。
『あなたがしようと心に決めたことは、
何でもできます』と。それから天のお
父様の助けをいただいて、ゴールでき
ました。』

ジェニーは、「実行」というスペン
サー・W・キンボール大管長からの
チャレンジを受け入れて、行きたい所
はどこへでも出かけて行きます。ハイ
キングに行き、水泳をし、ローラース
ケートやダンス、キャンプを楽しみ、
絵を描きます。将来はセミナーを卒
業して、車の運転を習い、アメリカ旅
行の旅費のため、神殿結婚をしようと
計画しています。今、一番の目標は、
ラジオ放送で自分の番組を持つこと
です。

ジェニーは、ボランティアとして病
院でラジオのディスクジョッキーを
したときから、喜んで聴いてくれる人
たちと音楽やおしゃべりを一緒に楽しみ

たいという希望を抱くようになりまし
た。クラシックからモダン音楽に至る
まで好きな歌は幅広く、マイクに向か
ってはユーモアあふれる落ち着いた口
調で語ります。

「小さいときから教会で話をしてい
るおかげで、マイクに向かって話すの
が好きなんだと思います」と、彼女は
にっこり笑います。

ホールトン放送のデリク・オーウェ
ンス局長は、うなずきながらこう言
います。「彼女はもともとアシスタント
として入ってきたのです。それが、あ
る日、ディスクジョッキーがひとり休
んでしまい、ジェニーがその代役を
堂々とこなして、見事な仕事ぶりを見
せたのです。そんなわけで、現在は、
毎週自分の番組を担当してもらって
います。」

上司からこのような賛辞をもらって
は、末日聖徒として、できる限りの模
範を示す責任をジェニーが感じるのも
無理はありません。

ときどき標準を落とそうとする誘惑
が、負けそうになるほど大きくなるこ
とがあります。特に、長年の夢がもう
一歩でかないそうになったときなど
そうでした。たとえば、大手ラジオ局の
有名なディスクジョッキーに会う招待
を受けたことがありましたが、それが
日曜日だったのです。

病院の同僚たちの励みになり、有力
者たちとも会うことができ、おそらく
は仕事の機会も増えるというので、ジ
ェニーは参加したくてたまりません
でした。仲間も、しきりに出席するよう
勧めました。しかし彼女は、安息日
についての気持ちを説明して、参加を断
わったのです。

ジェニーは言います。「同僚たちを
がっかりさせるとすると、ほんとに申
し訳ないと思いました。でも、そうし
なかつたら、自分や天のお父様をが
っかりさせて、もっと落ち込んだら
うと思います。それは同僚だって同じ
です。結局、私の悪い見本を見ること
になったでしょうから。」

ジェニーは、悪い手本が人との交
わりを台無しにしてしまうことがある
のを知っています。彼女が心のつなが
りを大事にしていることは、放送する
楽しい話題の中にもはっきりうかが
われます。

「お別れの時間がやって来ました。
でもその前に、これまでの2時間、私
にインタビューしてくれた女性を、私
の方からインタビューしたいと思
います。彼女も、末日聖徒イエス・キ
リスト教会の会員です。モルモン教
会と呼ばれることもあります。その
教会について、2、3質問してみま
しょう。」□

キリストを信じる

実生活で贖いの意味を理解するために

スティーブン・E・ロビンソン

➤ の宇宙における最大のジレンマは、次のふたつの
➤ 事実を両方とも受け入れなければならない点にあります。第1の事実は、教義と聖約第1章31節に記されています。「主なるわれは罪を見ていささかもこれを許すを得ざればなり。」つまり、主は決して罪を見てそのままにしたり、見逃したり、水に流したりするようなことはなさらないという意味です。主は、いささかの罪も見逃されないので。

第2の事実は、極めて簡潔にこう言い表わせます。「私は罪を犯し、人も皆罪を犯す。」

方程式を立てるのにこの2項しかなければ、結論は目に見えています。私たちは罪深い存在ですから、神の前ではいささかも許されない、ということになります。

しかし方程式の項は、このふたつですべてではありません。このジレンマを解消するために、キリストの贖いという栄えある計画が用意されたのです。私の家族に起こった出来事を例に取り、この大きなジレンマを解消するために贖いがどのように作用するか、説明しましょう。

最初は息子のマイケルの話です。確かマイケルが6歳か7歳のときでした。彼がちょっと悪いことをしました。マイケルはひとり息子なので、たとえ子供でも、私としては、父親の子供時代をしのぐ良い子になってほしいと願っています。つまり期待の息子なのです。そこで、私は息子を部屋に閉じ込めると、「お父さんがいいと言うまで、部屋にいなさい」と厳しく命じました。

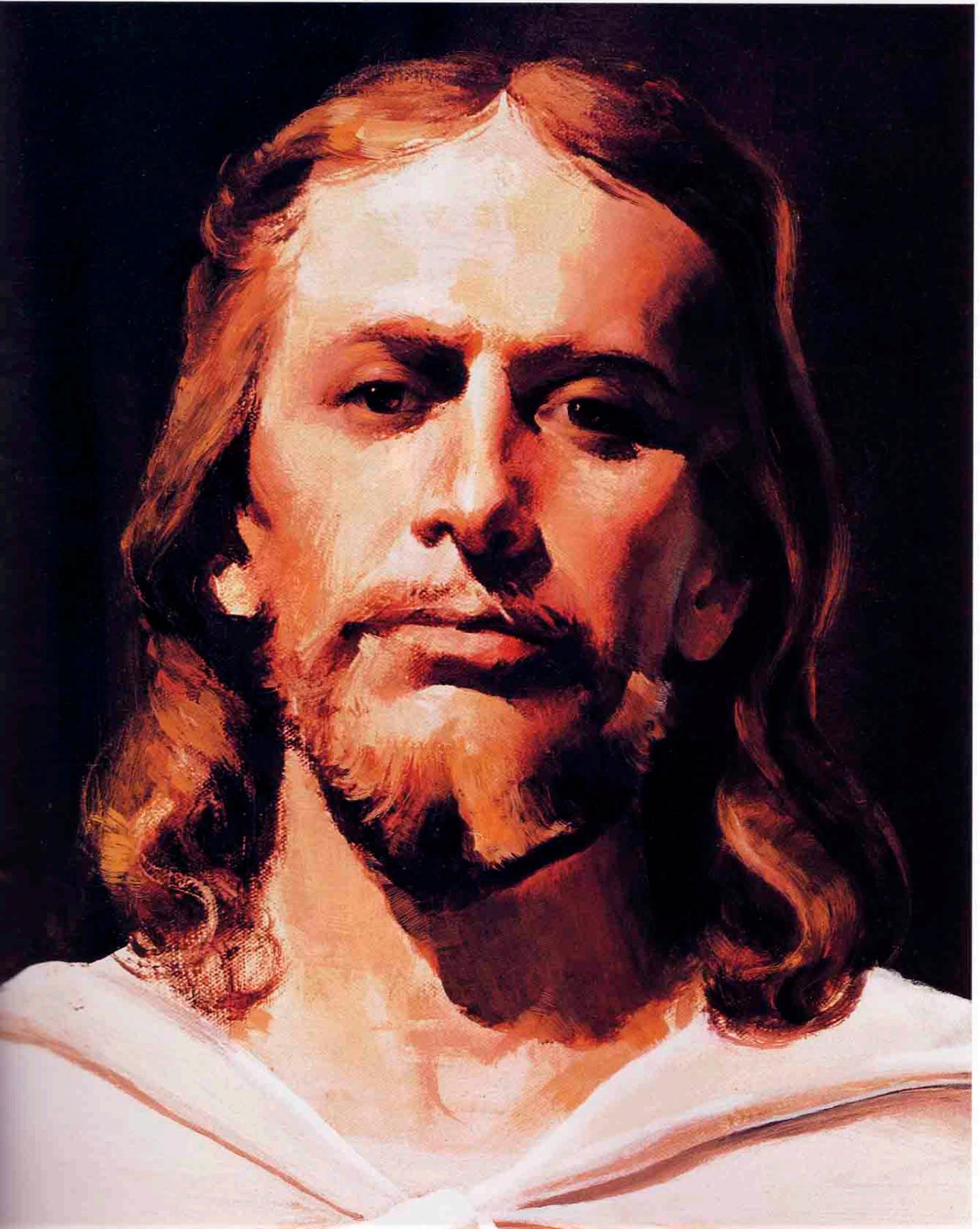
その後、私はそれをすっかり忘れてしまい、数時間後、私がテレビを見ていると、部屋のドアが開き、おそるおそる階段を降りてくる足音が聞こえます。「しまった！」

と思いました。急いで階段の所まで行くと、息子のはれぼったい目に涙をいっぱいためて立っているではありませんか。涙はあふれてほほを伝っています。息子は私を見上げると、部屋を出てよかったのかどうか不安だったので、こう言いました。「パパ、パパとはもう仲直りできないの？」どうして、できないわけがありません。私は息子をしっかりと抱き締めて、心からの愛を示しました。大切な息子です。どのようなことをしようとも、息子への愛は変わらないのです。

マイケルと同じように、私たちが天父のみこころに反した行ないをすることがあり、その結果、天父やみたまから離れてしまいます。霊的な意味で「部屋に閉じ込められ」してしまうのです。自らの霊を傷つけるたぐいの罪もあります。ときには、もう清められないのではないと思われることをしてしまう場合もあります。そのようなとき、天を見上げて、「父よ、もう和解はできないのでしょうか」と尋ねることも少なくありません。

この問いに対して、聖典のどこを開いても、「できます。キリストの贖いがあるからです」という答えが高らかに返ってきます。個人的には、私はイザヤ書第1章18節に書かれている言葉が好きです。

イエス・キリストを信じる信仰を持つということは、単にイエスの存在を信じるということではありません。それは同時に、罪を清め、日の光栄にふさわしい者にしてくださると言われた主のみ言葉を、そのまま信じることでもあるのです。





「主は言われる、さあ、われわれは互に論じよう。たとえあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。」

主がここで言われたのは、たとえそれまでどのようなことをしていようと、主のみ力によって清められ、ふさわしい者となり、罪なき者となり、日の光栄にふさわしい者になれるということなのです。

さて、イエス・キリストを信じる信仰を持つということは、単にイエスご自身が言われたイエス像を受け入れることでも、キリストの存在を信じることでもありません。それは、キリストをキリストとして受け入れ、信じることなのです。

教会の監督として、また教師として働いてきた私は、イエスが神の御子であり、世の救い主であると信じながら、イエスが自分を救ってくださるお方であると信じない人を大勢見てきました。そういう人たちは、イエスの存在そのものは信じていても、イエスに罪を洗い流し、清め、救う力があることを信じないのです。イエスの存在を信じる信仰を持つだけでは、本当の意味においてその信仰はまだ半分でしかありません。残りの半分とは、実際に罪を清め、人を救う力がイエスにあると信じる信仰を持つことです。キリストの存在を信じるだけでは十分ではありません。人を清め、人を日の光栄にふさわしい者とする力があると言われたそのキリストを、そのみ言葉どおりに信じる必要があるのです。

私が監督だったころ、このように言う会員が何人かいました。「監督、私は非常に重大な罪を犯しました。あんなことも、こんなこともしましたので、福音の完全な祝福にはあずかれません。これからも教会へ集いますし、多少は良い報いにあずかれるのではないかと考えていますが、あんなことをしてしまった以上、日の光栄の王国で昇栄の完全な祝福を受けられるはずはないと思います。」

こんなことを言う会員もいました。「監督、私は平凡な聖徒です。信仰も弱いし、不完全です。何々兄弟(姉



PHOTOGRAPH BY STEVE BENDERSON

間違いを犯したとき、
ちょうど私の息子が尋ねたように、
天父に向かい、
「お父様、もう和解は
できないのでしょうか」と尋ねる
かもしれません。
答えは高らかに響きわたります。
「できます。」

妹)が持っているような才能もありません。監督会(扶助協会の会長)に召されることもないでしょう。私は人並みですから、完全な昇栄より少し低い所でいい、行けたらそれで満足しようと思っているんです。」

こうした発言は、結局、次のように言っているのと変わりません。「私はキリストが言われたことがみなできる方だとはとても信じられません。キリストが私を昇栄に導いてくださる力がある方だなんて、とても信じられないんです。」

ある人が私にこう言いました。「監督、私は結局日の光栄の王国へ行けるような人間じゃないんですよ。」このように言い方に飽き飽きしていた私は、次のように返答しました。「問題の本質から逃げてはだめだよ。皆同じなのさ。完全な人間なんてひとりもない。自分の力だけに頼っていたら、どんな人間だって、神のみ前で生活できる完全な人間にはなれないさ。自分には、キリストご自身が言われたような力を信じる信仰がないんだということを、どうして認めようとしないんだ。」

これを聞いた相手は怒りました。「私にはイエスの証があるし、キリストだと信じている。」

私はこう答えました。「確かに君はキリストの存在は信じているかもしれない。でも、たとえ自分が今のところ日の光栄の王国へ行けるような人間ではなくとも、主と共に歩む決意さえあれば、私たちを日の光栄にふさわしい者にくださると言われたキリストのみ言葉をそのまま信じてはいないんだよ。」

なぜ救い主と呼ばれているか

完全な者にならなければという思いが重荷となって、絶望的な気持ちになることがあります。主が私たちを変え、王国に導いてくださるといふ、福音の最も輝かしい真理が信じられなくなることもあるかもしれません。10年ほど前の、私自身の経験をお話ししましょう。

当時、妻のジャネットと私はアメリカ合衆国のペンシ

ルベニア州に住んでいました。生活も順調で、私は昇進し、家族にとってその年はよい1年でした。しかし、ジャネット自身にとっては大変な年だったのです。その年、4人目の子供を出産し、大学を卒業し、公認会計士の試験に合格しました。ワード部扶助協会会長の召しも受けていました。私たちは神殿推薦状を持ち、家庭の夕べも開いていました。さらに私は当時、副監督として働いていたのです。

そんなある晩、妻にひとつの事件が起こりました。今から考えれば、そのときは妻が「霊の死」に向かって進んでいるような状況だったのです。妻は自分の問題について何ひとつ私に教えてくれず、話そうともしません。私にしてみれば、それが一番つらいことでした。2週間、妻は霊的な活動には参加しようとせず、召しからも解任されたいと言い出しました。

そんな状態が2週間も続くと、とうとう妻の方から切り出したのです。「いいわ。私の問題が知りたいのね。教えてあげる。何もかも、もうできないのよ。朝は5時半に起き、パンを焼き、縫い物をし、子供の宿題を手伝い、自分の宿題も片付け、扶助協会の責任を果たし、系図を書き上げ、学校のPTAの集会に出席し、宣教師に手紙を書き、……私にはとてもできないの。」そう言って、肩の重荷を次から次へと挙げていったのです。

自分の弱点や欠点も一つ一つ並べ立てていきます。「私にはモレル姉妹のような才能もないし、チャイルズ姉妹のようにうまくもやれない。子供たちにはなるべく、大声を上げないようにしているわ。でもだめ。つい大声を上げちゃうのよ。結局、私は不完全だし、とても完全になれると思えないわ。日の栄光の王国に行けるとも思えないし、そんな気にもなれないわ。だから、あきらめたの。できもしないことのために、どうして一生懸命努力しなければいけないの。」

ようやく夫婦の話し合いが始まりました。長い長い夜でした。私は妻に尋ねました。「ジャネット、君に証はあるかい。」



**「私はキリストを信じています」
と彼は言いました。
私はこう答えました。
「そうかもしれない。
しかしあなたは、
共に努力する気さえあれば、
日の栄光に
ふさわしい者にしてください
と言われたキリストのみ言葉を、
そのまま信じてはいないのです。」**

「もちろんだわ。だからこそつらいのよ。証が真実だとわかっていても、そのとおりにできないのよ。」

「バプテスマのときに交わした誓約は守ってきたかい。」

「もちろんよ、一生懸命努力してきたわ。でも、すべての戒めをいつでも守ってこれたわけじゃないわ。」

私は安心しました。自分が恐れていたような最悪の状態ではないことがわかったからです。活発な教会員で、教会が真実であるという証もあり、しかも指導的な立場にある人たちであっても、なお福音の心髄である「よきおとずれ」の部分を見失うことがないわけではありません。ジャネットがその状態でした。妻は何とか自分の努力で解決しようとしていました。妻は、なぜイエスが助言者や教師と呼ばれているか、その理由はわかっていました。またイエスが模範であり、教会の頭であり、長兄であり、さらに神である理由もわかっていました。そういうことはみなわかっていながら、イエスがなぜ「救い主」と呼ばれているのかという理由だけは、理解していなかったのです。

ジャネットは、イエスから助言をいただいたうえで、自分の力で解決しようとしていました。しかし、そうはいかないのです。完全な人間はひとりもいないからです。イテル書第3章2節には、史上最も偉大な予言者のひとりであるジェレドの兄弟が登場します。この予言者は信仰が非常にあつかったため、キリストは幕を取り除いてご自分の霊体をお見せになるわけですが、その予言者でさえ、次のような言葉で祈り始めているのです。

「主よ、……見たまえ、^{なんじしもべ} 女の僕は御前にて弱きものなれどわが弱きことを怒らたもうな。〔ジェレドの兄弟が、完全な神に祈りを捧げるに当たって、自分が不完全な人間であることの謝罪から始めている点に注目してください〕主は^{きよ} 聖きお方にて天にましますと、われらはその御前にて恵みを受くる資格のなき者なることを自ら知る。人類の始祖が墮落したる結果、われらの性質は常に悪し。されど主よ、われらが願うものを主より授かるために、

われらは主に願い求むべしと主は命じたまえり。」

私たちは今のところ日の光栄の王国にふさわしい者ではありません。しかし、だからこそ救い主が必要であり、私たちの願うものを授かるために神に祈り、求めるよう戒められているのです。救い主は、「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう」(マタイ5:6)と言われました。私たちはこの聖句を往々にして誤解しているようです。この聖句が「義なる人たちは、さいわいである」と言っていると考えがちですが、そうではありません。どういうときに飢えたり、渴いたりするのでしょうか。望んでいるものがないときです。神が今お持ちの義や、日の光栄の王国の義に飢え渴いている人たちが、幸いなのです。そのような義が心の望みである限り、必ずそれは与えられ、飽き足りるようになるはずです。私たちには「われらが願うもの」が授けられるのです。

ひとつとなる

この世で完全になるには、キリストの贖いに頼るしか方法はありません。独力で完全な者にはなれないのです。私たちは、完全なお方である主とひとつになる必要があります。実業界で言う、「合併」です。倒産寸前で銀行からも見放された小会社が大会社と合併すると、何が起ころでしょう。ふたつの会社の資産や債務がひとつになり、新しくできた会社が債務を支払えるようになります。

ジャネットと結婚したころ、私はお金がなくて困っていましたが、妻は銀行に預金がありました。結婚の誓約を交わすのを機に、私たちは銀行に連名の口座を設けました。その結果、「私のお金」という言葉も、「彼女のお金」という言葉もなくなりました。経済的にはいつも、「私たちのお金」ということになったわけです。この連名の口座で、私の負債と妻の資産がひとつになり、数カ月ぶりに私の負債は消えました。

霊的な意味では、救い主と契約を交わすときに同じことが起こります。私たちには負債があり、救い主には資産があります。救い主の申し出により、私たちは契約関係に入ります。私はここで「申し出」という表現をわざと使いましたが、この契約が、結婚の申し出と同じように、霊的な意味で結婚関係に入ることだからです。救い主が「花婿」と呼ばれるのもそのためです。この契約関係の深さゆえに、聖典ではそれが結婚にたとえられたわけです。私はキリストとひとつになり、ふたりで力を合わせて私の救いのために働きます。私の負債とキリスト

の資産がひとつになり、私は自分にできることをすべて行ない、足りない部分はキリストが補ってくださいます。こうして私たちはふたりとも、完全になるわけです。

救い主が、「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ11:28)と言われたのはそのためです。完全な者になるという戒めほど、重い荷があるでしょうか。次の世に望みをつなぐには、この世の生涯で完全な者とならなければならないのです。また、律法のくびきほど重い荷もほかにあるでしょうか。

救い主は言われました。「わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやしく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ11:29-30)

「わたしにより頼みなさい」

ニーファイは偉大な予言者のひとりでしたが、それでも救い主により頼まなければならないことを痛感していました。こう言っています。「『ああ、私は不幸な人間である』と。まことに、私はわが肉体のために心に憂いがあり、自分の罪悪のために私の心は悲しむ。私は非常にたやすく追ってくる誘惑と罪悪とのために取り巻かれている。故に私が喜ぼうとすると、自分の罪のために私の心は苦しみにうめく。」(II ニーファイ 4:17-19)

罪から救われるために救い主の必要性を痛切に感じていたニーファイですが、彼は現世の生活に感謝の念を抱いていなかったのでしょうか。そんなことはありません。次の聖句が鍵です。「さりながら、私は今までに誰を頼みにしているかを知っている。」(II ニーファイ 4:19)

ニーファイは自分が不完全な人間であることをよく知っていました。自分の罪のために苦しんでいました。まだ日の光栄の王国に行ける状態ではなかったのです。それでも、自分がだれを頼みにしているか知っていました。ニーファイは、イエス・キリストには自分の罪を清め、神の王国へ導いてくださる力があることに、全幅の信頼を寄せていたのです。

私の友人に、たびたび次のようなことを言っていた人がいます。「私の人生も半分終わったわ。日の光栄の王国まで半分来たというところね。計画どおりだわ。」

ある日、私は彼女にこう尋ねました。「ジュディー、もし明日死んだらどうなる？」そんなことは、今まで考えてみたこともなかったのでしょうか。

「そうねえ、日の光栄の王国まで半分というところだから……月の光栄の王国の途中というところかしら。それじゃ、まだだめよね。」

救い主と契約を交わしている私たちは、たとえ明日死んでも、日の光栄の王国に行ける希望があることを知っておく必要があります。それは、契約関係に入った者に約束されている祝福のひとつです。しかし、そのような希望についての約束を理解していない人や、祝福にあずかっていない人が多いのも事実です。

我が家の双子の娘がまだ小さかったころのことですが、プールへ連れて行って泳ぎを教えようと思いました。まずリベカから始めました。私はリベカを連れて水に入り、「さあ、泳ぎを教えるぞ」と考えていました。ところがリベカの方は、「パパは私をおぼれさせようとしているんだわ。私、死ぬかもしれない」と考えていたのです。プールの深さはちょうど1メートルくらいでしたが、リベカの身長は当時90センチしかありませんでした。リベカはひどく怖がって、泣き叫び、手足をばたつかせて暴れ出しました。とても教えられる状態ではありません。

そこで私はリベカをしっかりと抱き止めて、言いました。「さあ、パパがしっかり支えているよ。パパはリベカのことを愛しているんだから、絶対何も心配はないよ。さあ、手足の力を抜いてごらん。」ようやく、リベカは私に頼ってくれました。手足の力を抜いたリベカの体を私が両手で支えます。「そう、そう。両足を強くキックしてごらん。」こうしてリベカはついに泳げるようになったのでした。

霊的な意味で、次のような質問に同じように恐れおののく人が少なからずいます。「自分は日の光栄の王国に入れるような人間だろうか。本当にいつか行けるのだろうか。きょうも正しい生活を送ったのだろうか。」自分は命にあずかるのだろうか、それとも滅びるのだろうか、日の光栄の王国に行ける生活をしてきたのだろうか、といったことを考えると怖くなってしまい、進歩できなくなってしまいます。そのようなときこそ、ある意味では救い主がみ手をもって私たちを抱き締め、こう言っておられるときなのです。「私があなをしっかりと支えているのだよ。私はあなを愛しているのだから、あなが滅びるようなことはさせない。さあ、肩の力を抜いて、私に頼りなさい。」そして私たちが肩の力を抜いて主に頼り、主の存在を信じるだけでなく、主のみ言葉まで信じることができれば、初めて私たちは福音の教えに添った生活をするようになります。すると主のみ言葉が聞こえてきます。「それでいい。さあ、什分の一を納め始めな

さい。そう、そのようにして完全な什分の一を納め続けるのですよ。」こうして私たちは進歩し始めるのです。

アルマ書第34章14-16節にはこう書かれています。

「モーセの律法は一言一句みなこの偉大な最後のいけにえを指し示している。このように指し示すのが全くこの律法の目的である。この偉大な最後のいけにえとなるべき方は、すなわち神の御子(イエス・キリスト)であるから、これは無限無窮のいけにえである。

神の御子はこのようないけにえとなって、自分の名を信ずる者たちをみな救いたもう。この最後のいけにえの目的は憐みを与えるのであって、この憐みは正義の要求する罰に勝ち、また悔改めを生ずる信仰を人に与えるためにその道を設けるのである。

もしも人が信じて悔い改めるならば、道がすでにできているから憐みは正義の要求を満足して、悔い改めた者たちを安全に保護することができる……。」

「安全に保護する」という表現は、モルモン経の中でも私の好きな言葉です。

末日聖徒は「救われる」ことを信じているのでしょうか。もし私が自分の勤める大学の宗教クラスの生徒に向かって、改まった調子で同じように「私たちは救われることを信じているのでしょうか」と質問をすると、普通は3分の1くらいの生徒が首を横に振って、次のように言います。「とんでもない。そんなのはほかの宗派で信じていることですよ。」なんと寂しいことでしょうか。私たちこそ確かに、救われることを信じているのです。だからこそ、イエスが「救い主」と呼ばれているのです。もし救われなければ、救い主がおられることに一体どんな意味があるのでしょうか。それはまるで、いすから立ち上がろうとしない水泳監視員のようなものです。「おっと、あそこでだれかがおぼれかけているぞ。おーい、背泳ぎをやってみろよ。うーん、まずい、あれは助かりそうもないな。」私たちには救い主がいます。救い主は弱い私たちに、欠けているところに、不完全さに、そして心の中の肉欲に従う部分に、手を差し伸べて救ってくださるのです。

ジョセフ・スミスが受けた日の光栄の王国の示現の中で、その王国の人々が次のように描写されています。

「これらの者は、神とキリストとがすべてを審きたもう者にて在す天にその名を誌する者なり。これらの者は、新しき誓約の仲保者……イエスによりて完くせられたる義人たちなり。」(教義と聖約76:68-69)

義人たち、善男善女たち、義に飢え渴く者たちは、新しい誓約の仲保者イエス・キリストを通して完全な者と

されるのです。

すべてを主にゆだねる

妻が自分をふさわしい人間ではなく、ふさわしくなれるかどうかもわからない、という気持ちを抱いたとき、夫婦でいろいろ話し合いましたが、そのとき、私は2カ月ほど前に我が家で起こったある事件を思い出しました。私たちはその出来事を「自転車のたとえ話」と呼んでいます。

ある日私が帰宅し、いすに座って新聞を読んでいたときです。7歳になる娘のサラがやって来て、こう言いました。「パパ、私、自転車が欲しいの。近所で自転車を持っていないのは、私だけなんだから。」

私は自転車を買ってやってもいいと考えていましたので、少しもったいをつけながら、「いいよ」と答えました。

「いつ、買っていいの。」

「これからお小遣いを全部ためてごらん。自転車のお金もすぐにたまるさ。」私がそう言うと、サラは喜んで出ていきました。

2週間後、私が同じようにいすに座っていると、サラが何か母親の手伝いをして、お小遣いをもらっているではありませんか。サラが別の部屋に入っていくと、「チャリン」という音が聞こえます。「サラ、何してるんだい」と私が尋ねました。

サラは部屋から出てくると、手にきれいに洗った小さな瓶を持っていました。瓶のふたには小さな穴が開けてあり、底には硬貨がたくさん詰まっています。サラは私を見詰めて、言いました。「パパは、私がお小遣いを全部ためたら、すぐ自転車を買えるようになるって言ったでしょう。だから、もらったお小遣いは全部ためたのよ。」

私の心は娘に対するいとおしきでいっぱいになりました。サラは、私の指示に従おうとして、自分でできることをことごとく行なっていたのです。私は娘にうそをついたわけではありません。お小遣いをため続けていけば、間違いなく自転車は買えるようになるでしょう。しかし、



だれもが、
ぜひとも日の光栄の王国に
入りたいと願っています。
しかし、それには、
自転車を欲しがった
私の娘のように、みずから
最善の努力を払ったうえで、
愛する天父から助けをいただく
必要があるのです。

そんなにたまるころには、今度は車が欲しいと思うようになっていないでしょうか。いつまでたっても、願いはかないません。そこで私は、「町へ行って、自転車を見てみよう」と言いました。

私たちはペンシルベニア州ウィリアムズポートの店という店をみな訪ね、とうとう、一番ぴったりした自転車を探し出しました。自転車に乗ってみたサラは大喜びです。ところがサラは自転車の値札を見て、顔色を変えました。しまいには泣き出したのです。「パパ、お小遣いをためて、自転車を買うなんて私には無理だわ。」

私は尋ねました。「今いくら持っているんだい。」

「61セントよ。」

「じゃ、こうしよう。サラがこれまでためたお小遣いを全部パパに渡して、パパにだっこしてキスしてくれればいい。そうすれば、パパが残りのお金を出してあげよう。」娘は私を抱き締めて、キスしてくれました。そして61セントを渡したのです。私は残りのお金を足して、自転車を買いました。そして、家へ帰るのに自分の車を随分ゆっくり走らせる羽目になってしまいました。

サラがどうしても自転車から降りず、歩道を自転車で走って行ったからです。娘が自転車で走るそばをゆっくりと車を運転しながら、私はふと考えました。これはキリストの贖いのたとえ話だと。

私たちには切実に求めるものがあります。自転車の比ではありません。私たちの望みは日の光栄の王国です。天父と共に住むことです。私たちがどれほど一生懸命努力しようと、十分ということはありません。ある段階まで来ると必ず、「もうこれ以上は無理だ」ということを認識します。妻のジャネットは、あのとき、そういう段階だったのです。その段階こそ、救い主の言われた福音の契約のすばらしさを味わう時なのです。救い主はこう言われました。「心配することはない、あなたは完全ではないのだから、私にあなたのすべてをゆだねなさい。私を抱き締めてキスをするだけでよい。そうやってあなたは私と個人的な関係を結ぶのだ。あなたができないと

ころは、私がしよう。」

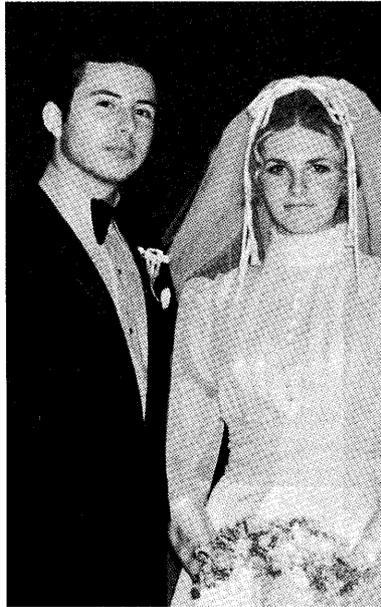
み言葉には苦しい面と喜ばしい面があります。苦しい面は、最善を尽くすよう求められていることです。私たちはできるだけ一生懸命努め、自分にできることはことごとく行なう必要があります。しかし、喜ばしい面は、私たちができることをことごとく行なってしまえば、とりあえずそれで十分だということです。私たちは主と共に永遠に進歩し、いつか完全な存在となります。しかし、今のところ、私たちは主と契約を交わし、主の助けを受けたときだけ完全なのです。主の完全さに頼ったときに初めて、完成への道を歩み始める希望が持てるのです。

どのようにして完全な者となれるのか、私たちふたりは話し合いを重ね、ジャネットはようやくそれを理解しました。ジャネットが涙を浮かべて言った言葉は今でも忘れられません。「これまでもずっと、主が神の御子だと信じてきたわ。主が私たちのために苦しまれ、亡くなられたと信じてきたわ。でも、今やっとわかったの。主は罪深い、弱い私を救ってくださる力がある方なのね。ふさわしくない私も、才能のない私も救ってくださるのね。」

どれだけ多くの人々が、ニーファイの次の言葉を忘れていることでしょうか。「^{きよ}聖いメシヤの^{くどく}功德と慈悲と^{めぐみ}恩恵とに頼らなければ、神の御前に住まえる人が一人もない……。」(II ニーファイ 2 : 8)

ほかに道はありません。自分で自分を救おうとしている人が大勢います。彼らは、イエス・キリストの贖いが身近にあるにもかかわらず、「自分がやり終えたら、自分が完全になったら、自分がふさわしい者になったら、そのときには贖いを受けるにふさわしい者となっているだろう。その段階で初めてキリストに頼るよ」と言っているようなものです。それはできないことなのです。まるで「元気になってから薬を飲むよ。そのころには薬も飲めるようになっていだろうから」と言うのと同じです。贖いはそのような目的のために備えられたものではありません。

私の愛唱する賛美歌のひとつに、「おお、主の愛深し、



**キリストと契約関係に入ること、
聖典は結婚にたとえています。**

**私たちは皆
キリストとひとつになり、
自分の救いのために
主と手を携えて
働く必要があるのです。**

救いの血を思い、主を愛し、み業をなさん」(賛美歌110番『街を離れたる青き丘に』)という歌があります。私がこの賛美歌を愛唱する理由のひとつは、この歌詞がああ契約関係のふたつの面を歌っているからです。私たちは、自分に与えられた力をすべて使って「み業をなさん」とする必要があります。私たちはできる限りのことをしなければならぬのです。できる限りのことを行なってから、その上で、「救いの血を思い」その贖いの力により頼むのです。救い主には私たちのできないことを代わってしてくださる力があると信じなければならぬのです。

ブルース・R・マッコンキー長老は、かつて、この状態を「福音の馬具につかまる」と表現したことがあります。私たちが福音の馬具につかまっているときは、確かに王国に向かい目標から目を離さずに馬を走らせている状態なのです。たとえ、私たちがまだその王国に到達していなくとも、この世の生涯で王国を目標に馬を走らせている限り、永遠の生涯でもその王国を目指しているのだという自信が持てます。キリストの贖いを通じて、私たちはその目標に向かって進むという希望を抱き、

やがてその目標に到達できるという期待が抱けるのです。

イエス・キリストは神の御子であり、世の救い主です。主は私たち一人一人の救い主です。ただそのためには、栄光に満ちたあの契約を主と交わし、自分の持てるすべてを主に捧げる必要があります。それがたとえ61セントであろうと、1ドル50セントであろうと、あるいはまた2セントであろうと、手元には何も残してはなりません。すべてを主に捧げなければならぬのです。加えて、自分にできない部分を主が代わってくださり、完全には遠い私たちのために不足を補ってくださるという信仰と信頼とを抱く必要があります。これこそ、負いやすいくびきであり、軽い荷にほかなりません。□

* スティーブン・E・ロビンソン——ブリガム・ヤング大学古代聖典学部学部長。



み言葉を味わう

グアテマラのナワラという町では、扶助協会に集う熱心なインディアンの姉妹たちの間に奇跡が起きています。母国語のキチュー語でレッスンを受けているのです。教師は、伝統的なマヤの民族衣装、コルテとウィーピル(手の込んだしゅうを施した手織りのスカートとブラウス)を身に着けたインディアンの姉妹で、スペイン語をキチュー語に翻訳しながらレッスンをしています。

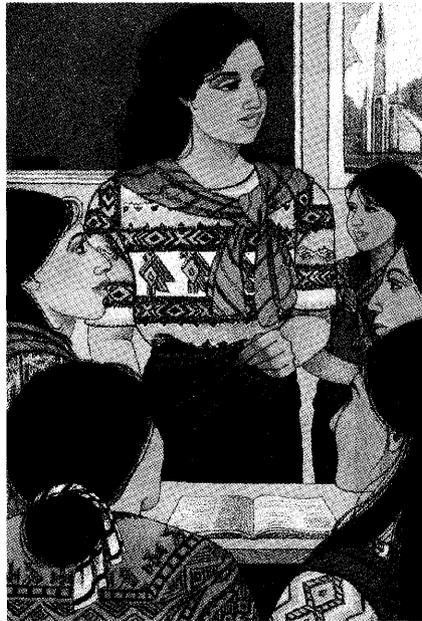
この教師は、とりわけ女性にとって学校教育を受ける機会が少ない地域に住みながら、独学で読むことを学び、ほかの姉妹にも教え始めました。多くの時間を費やして自力で学んでいる彼女の姿を見て、扶助協会の姉妹たちの間にも学習意欲がわき上がってきたのです。ナワラの姉妹たちは、共に「キリストの言葉をよく味わう」っているのです。(IIニーファイ31:20)

救い主は「汝ら互いにこの王国の教義を教ゆべし」(教義と聖約88:77)と命じられました。扶助協会の姉妹たちは世界中至る所で、この救い主の教えに従い、与えられた才能を伸ばし、神のみ言葉の力を共に味わっています。

学ぶことは、自分自身やほかの人を啓発するのにどのように役立つでしょうか。

「学問を求むべし」

人は生まれたときから学び始めますが、生涯学び続ける必要があります。



ILLUSTRATED BY LORI ANDERSON

スペンサー・W・キンボール大管長の妻、カミラ・キンボール姉妹はみずから模範を示して生涯学び続けました。70歳を過ぎてもなお、毎年大学でひとつかふたつのクラスを受講したのです。キンボール姉妹はこのように述べています。「学ぶということは、あらゆる種類の経験に対して常に心を開いているということです。適切なときにクラスを受講するのもそのひとつですが、私たちは常に心を開き、目を見開き、ほかの人々や国々を理解しようと願うべきではないでしょうか。また、子供たちが喜んで学べるように助けるべきだと思います。」

主はこのように述べておられます。「汝ら努めて求め、互いに智恵ある言葉を教うべし。然り、汝ら最も善き書より智恵ある言葉を探し求めよ。また正に研究と信仰とによりて学問を求むべし。」(教義と聖約88:118)

私たち各自がそれぞれ置かれた状況の中で、教育を受け続けるにはどうしたらよいでしょうか。

み言葉を分かち合う

私たちは人生でどのような状況に置かれても、自分自身やほかの人のために光と真理を求めることができます。「知識と知恵があると、私たちは真実と誤りを区別し、より良い選択をすることができます。……自立するためには以下のことを行なう必要があります。

- 読み書き、基本的な計算の能力を高める。
- 聖典をはじめ、良書を読んで研究する。
- 人とのコミュニケーションを円滑にすることを学ぶ。
- 知識を増す機会を利用する。」「(主の道にかないて助けをなす—福祉に関する指導者用ガイド」p.6参照)

世界中には、女性が読み書きを学ぶ機会のない所がまだたくさんあります。自分の住む地域社会で読み書きを学ぶ活動にボランティアとして奉仕することにより、私たちもこうした状況の改善に貢献できます。書物を手に入れることがほとんど不可能な地域もあります。モルモン経基金により、無数の人々が母国語でこの貴重な書物を読むことができるようになってきました。

私たちが家族や地域社会の中で、光を照らし真理を広める助け手となるにはどうしたらよいでしょうか。□

信仰という名の冒険

ローレンス・H・キム

モルモン経は福音に対する証をはぐくむうえで鉄の棒となりました。

バプテスマを受ける前のことです。初めてモルモン経を読んだとき、私はいくつかの箇所がよく理解できなくて苦労しました。職場の同僚であるフランクは教会員で、私たちは毎日のようにしばらく腰を下ろして話し合いました。私はフランクにモルモン経についてむずかしい質問をしましたが、フランクはいつもそのときの私に役立つような有益な答えをくれました。

モルモン経を読み終わって、私はこの書物について祈るよう努めました。燃えるような証を得たわけではありませんが、そこには真実が書かれていると感じました。それが歴史上実際にあったことであるという確信はありませんでしたが、重要なキリスト教の文書であると信じることはできました。そしてモルモン経は靈感によって記された書物であるとの結論を得ました。

教会や会員たちを見ていると、日々の生活の中で靈性と福音の実践とが相まって、私を含めて人々の心を動かし、その生活に影響を与えていることがわかりました。また、モルモニズムとは新約聖書に記されたキリストの教えを実際の行動に移したものであるとも感じました。こうして、私は地上における真のキリスト教徒の生き方の最高の模範というべき教会を見いだしたのではないかと興奮していました。そして、天父に謙遜な祈りを捧げ、「私はこの教会に入るべきでしょうか」という単純な質問をしようと決心するに至りました。

居間の暗やみの中でひざまずき、主に私の心を打ち明け、私の探求、苦悩、主のみこころを行ないたいという望みを告げたのでした。私はどのような答えを受けても

それに従おうと心に決めていました。祈り終わった後で私は聖書に手を伸ばしました。ページをめくっていると、「そうです。あなたはバプテスマを受けるべきです」というはっきりした導きを心に感じました。私は喜びに涙があふれました。ようやく、なすべきことがわかったのです。

それ以来、モルモン経の真実性についての確信が深まるにつれて私の福音に対する証も強くなっていきました。しかし、この過程にはいつも様々な苦しい奮闘が伴いました。

祈りを伴う研究

私がバプテスマを受ける決心を家族に話したところ、父は愛想を尽かしたように顔を背けました。私はまったく打ちのめされた思いでした。この世のだれよりも愛し尊敬する人から、私の人生で最も大切な決定にひどく反対されたのです。

バプテスマを受けて2、3カ月後、私は初めて反モルモンの人々の作成したものに出会いました。教会の批判者として知られているある人が私の両親にテープを渡したのです。両親は私が教会に入ったことをとても心配しました。そして、私もそのテープを聞いて心配になってしまいました。

そのテープは否定的で、もっともらしく聞こえる部分もありましたが、私はこれが真実であるはずがないと強く感じました。この教会を研究する過程で、何度もみた



まを感じたことがあったので、教会が真実であることを否定することはできませんでした。そこで反モルモンの主張を研究してみることにしました。私は祈りをもって聖典(特にモルモン経)に向かい、聖典に通じた教会員が私の質問に答えてくれました。このことを通して、私が教会に入ったのは正しい選択であったことをそれまで以上に強く確信しました。

それで私も、特別に両親のために自分でテープを作り、反モルモンのおもな非難に答えました。私は両親にテープを聞いてもらいました。テープを聞いた後、父は涙を流してこう言いました。「すばらしい教義だ。」それから私たちは互いに抱き合ったのです。この経験は、私たちの間に新しい関係が生まれる出発点となりました。

「その人に見覚えがあると思うわ」

私がステーキ部伝道部長に召された翌日、まだ私の新しい召しを知らない母が私の夢を見たと言いました。その夢の中で私は教会の新しい責任を受け、部屋いっぱいの人の見守る中で、年配の男性が私を聖別するように私の頭に手を置いていたというのです。それから私は母に新しい召しについて話し、任命される過程について話しました。「もしその男性を見たら、きっとその人に見覚えがあると思うわ」と母が言ったとき、私は驚きと感動を覚えました。

私は任命される時両親を招待しました。S・ディルワース・ヤング長老が私を任命した後、母は「私が夢の中で見たのはあの人よ」と言って涙ぐみました。私はこの機会を捕らえて、両親に証を述べ、何も心配する必要はないことをわかってもらいました。私の父は初めて教会についていくつか質問をしました。私たちは皆主のみたまを感じ、母は喜びの涙を流していました。

強められた証

モルモン経に対する私の証が大きく強められたのは、私と妻のジャンがエクアドルのキート伝道部に指導者訓練のための専任の召しを受けたときでした。ユタ州プロボの宣教師訓練センターにいる間、私は絶え間なく霊的な糧を得、モルモン経をもう一度読み直しました。モル

モン経を読んでいると、それが真実であり歴史上の事実であることに対する疑いを差しはさむ余地はなく、どこを開いても言葉が心の中に流れ込むように感じました。モルモン経が真実であることがはっきりわかり、いかにしてモルモン経の教える原則に忠実に生きるかという課題が私の心を占めるようになりました。

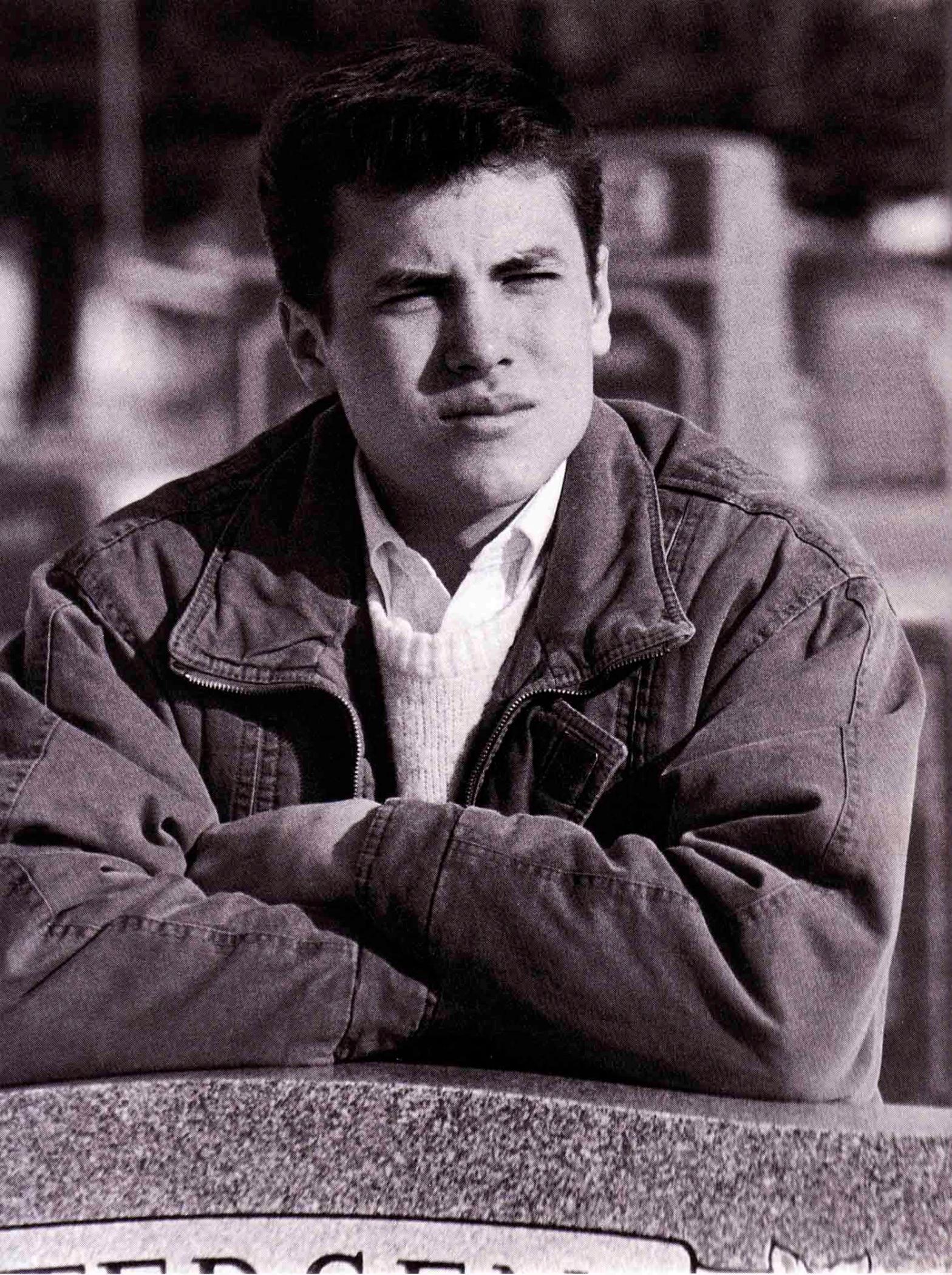
この召しに就いている間、エクアドルの聖徒たちの証を聞く機会があり、私の証は再び強められました。このような特別な証の中でも最も感動的だったのは、オタバロの聖徒たちの証でした。彼らは文字どおり古代インカの純粋な子孫でしたが、父から息子へと口承されてきた彼らの歴史はモルモン経の物語に非常に似ていました。そのためオタバロインディアンはモルモン経は自分たちの書物であると信じていたのです。

この召しから解任された後、私たちはエズラ・タフト・ベンソン大管長の勧告に従いモルモン経を再び読むことにしました。このときはエクアドルの会員たちの中で得た経験や彼らの証が心の中^{めいそう}にありました。そして、ある箇所を何度も読んだり、冥想したり、下線を引いたり、ほかの聖句を参照したりしました。私は、このような様々な経験から「モルモン経が真実の書物であることを知っている」と証できます。

20年後

バプテスマを受けてから20年がたちました。これまでにモルモン経を少なくとも10回は読みました。この特別な書物について深く考える度に、私は新しい発見をします。私の両親はモルモンがまじめなキリスト教徒であると信じてくれています。私たちはお互いが自分たちの宗教に献身的であることに尊敬の念を抱いています。私たちは互いの教会を訪れ、共に祈り、聖典を読み、福音の原則について話し合い、家族としての霊的な礼拝の集いを持っています。ときにはそのような集いで、モルモン経から聖句を引用することもあります。私は強い証を持っていますが、これからもモルモン経を研究するにつれて、この証はさらに深まることでしょう。□

*ローレンス・H・キム兄弟——アリゾナ州メサステーキ部メサ第11ワード部所属。ワード部伝道主任。



私の母はなぜ 亡くならなければならなかったのですか

私の母は、昨年亡くなりました。福音が慰めをもたらしてくれるだろうとみんなは言いますが、私にはそう感じられません。ときどき、母がわざと私を置いて行ってしまったような気がして、母に対して怒りを感じることもさえます。主が幕の向こう側で母を必要とされたのだ、と言われると腹が立ってなりません。どうして主が私以上に母を必要だなどということがあるのでしょうか。ときには、神様に対しても怒ってしまうことがあります。どうしたら平安を見いだすことができるのでしょうか。

本誌の答えは問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。

回...答

多くの人は、愛する親しい人が亡くなると、非常な喪失感を覚えます。それが人生の若い時期に起こったときは、特につらいものです。あなたが感じていることは、とても現実的で、堪え難いものであり、同時にまったく自然の感情です。

専門家によれば、愛する人を亡くした場合、ほとんどの人が、同じような「悲しみの感情の変化」を経験するそうです。この変化には時間がかかります。もちろん、この変化の中身も、それが終わるまでにかかる時間も、人によって様々です。

最初の段階は、大概精神的なショックと否定の気持ちです。「うそだ。ほくのお母さんが死ぬなんて。そんなことあり得ない。ほくがそんな目に遭うはずがないじゃないか。」

次に来るのが、怒りです。これは痛みや苦痛に対してよく起こります。「神様がほくの母さんを死なせるなんて、我慢ができない。」あなたの質問から察すると、あなたは悲しみの変化の、この段階にあるのでしょうかね。

そのほかに見られる反応に、条件付けがあります。「もしも母さんが戻ってくれたら、ぼくはよく手伝いをして、いつもやさしく親切になるのに。」多くの人は絶望し、苦しみます。「本当に行ってしまったんだ。お母さんなしで、どうやって生きていけばいいのかわからないよ。」

それから、受け入れる段階が来ます。そしてこのとき、福音が極めて大きな違いをもたらすのです。「人生は本当に永遠なんだ。死は人生の一段階に過ぎないんだ。母さんは死んでも近くにいてくれるって、福音が教えてくれているもの。」

あなたが今抱えている感情は、まったく自然なものなのです。実際、心が変化するうえで、この段階は、あなたに必要なものなのかもしれません。最後には、あなたも受け入れるという段階に到達するでしょう。怒りは静まり、そして慰め主である聖霊からもたらされる静かで、心地よい、平安な気持ちを感じることでしょう。

付け加えれば、亡くなった人すべて

が、「この世より、幕のかなたで必要とされていた」と考えるべきではありません。スペンサー・W・キンボール大管長は、著書「奇跡に先駆ける信仰」の中で、こう言っています。「主が、その人に心臓発作を起こされたのだろうか。その宣教師の死は間違った時に訪れたのだろうか。答えられる者がいれば答えてほしい。私には答えられない。神が私たちの人生で重要な役目を担っておられることは知っている。しかし、神ご自身がどこまで事を引き起こされるか、または単にその許可を与えられるかについては、計り知ることができないからである。」(p.96)

さて、何があなたの助けになるでしょうか。まず、友達、お父さん、おじいさん、監督など、あなたを愛してくれている人と自分の感じていることを話し合ってください。きっと良い助けになるでしょう。心が痛むときには泣いてもいいのです。痛みを人と分かち合っても、それがなくなるわけではありませんが、耐えやすくなるようになります。

それから、神権の祝福も助けになるでしょう。お父さんやホームティーチャー、そのほか信頼のおける神権指導者に頼んで、そのふさわしい手をあなたの頭に置いて、天父があなたに与えたいと望んでおられる慰めの言葉やメッセージを伝えてもらってください。

その後は、良い時間の過ごし方を見つけてください。人に奉仕をしてください。聖典を読んでください。(多くの人が、教義と聖約第12章1節から10節、またマタイによる福音書5章から7章にかけての山上の垂訓を読んで慰めを得ています)学校でいい成績を取れるようによく勉強してください。

多忙な日々を送り、活動的であることによって、悲しみが移り変わる時期を切り抜けるのも楽になるでしょう。

慰めになることはほかにもあります。いつの日か、もう一度お母さんに会えることはご存じだと思いますが、時がたち、あなたの証が強まるにつれて、その確信はもっと強くなることでしょう。彼女はどこかへ行っていなくなってしまうわけではありません。彼女の霊は今も生きており、キリストの贖罪によって永遠に生き続けるのです。

最も大切なのは、ひざまずいて、天父に心からの祈りを捧げ、自らを神のみ手にゆだねることです。それから、主を信頼してこう言ってみてください。「私は重荷を背負っています。もううたたくたで、とてもひとりでは背負いきれません。どうか私を助けてください。」

主はあなたを必ず助けてくださいます。必ず。

「悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。」(マタイ5:4)

青少年の意見

私にも、平安を感じられないときの気持ちがよくわかります。私の父は、私が10歳のときに亡くなりました。天のお父様が私を慰めてくれると、皆は言ってくれましたが、最初の何カ月かは、慰めどころではなく、苦痛と怒りしか感じませんでした。

悲しみに暮れていたある晩、私は父の夢を見ました。そしてその夢のおかげで、父の死を理解し、平安を感じるができるようになったのです。今私は、父が慕のかなたで、人を助けるすばらしい働きをしているのを知っています。本当に幸せで、平安に満ちた

人生を送るために、自分の心の奥深い所を見詰めて本当の平安を見いだす必要があると思います。



オハイオ州
パウエル
ベント・ハイザルト(16歳)

その気持ち、私にもよくわかります。私の母も、私が6歳のときに亡くなりました。私には弟が3人と妹がひとりいました。

私の場合、親友に、母のことや自分の感じていることを聞いてもらったのが、とても助けになりました。

また、自分の部屋に入って鍵をかけ、思う存分泣くと気持ちが落ち着きますよ。私も数え切れないほどそうしましたが、本当に助けになりました。

ノースカロライナ州
ウエークフォレスト
エバ・カーニー(12歳)

あなたが望んでいる平安を得るには、時間がかかります。一晩では無理です。私の母は5年前、癌で亡くなりました。愛する人を失うということは、大変なことです。私は、父や兄弟たちともっと心を通わせ、自分が感じたことを話したらよかったと思います。私は反対に、自分の気持ちを隠そうとしました。父が再婚し、共にほかの町へ引っ越したとき、自分の頑固さのため、ますますひどくなる一方でした。母の思い出となるものが自分の周りからすべてなくなってしまう、胸の張り裂けるような思いをしました。「こんな目に遭わされ、私の人生は惨めなものになって

しまった」と天父を責めたものでした。

私は今、心の内に平安を感じています。過去の痛みを忘れ、未来を見詰めることにしたからです。もちろん、なぜなのかと考えるときもありますが、天父は永遠という見地から人生を見渡しておられますが、私たちにはごく狭い視野しかないのだと思います。

あなたが家族と心を開いて話し合っていくように願っています。どんなふう感じているかを伝えてください。

天父に近くあってください。天父は私たちすべてを愛しておられます。そしてあなたが本当に落胆し、悲しんでいるときに、慰めてくださいます。それを証できます。



カリフォルニア州
ダンビル
メアリー・ベス・
ペントリー
(18歳)

あなたの気持ちはよくわかります。私の母は、私が8歳のとき、亡くなりました。私は苦々しい思いにとらわれ、教会に関することは何もかも毛嫌いしました。特に、私や家族から母を奪い去った神様を憎みました。

長い間、教会の活動に参加するにはしましたが、熱心ではありませんでした。17歳になったとき、ローレルのアドバイザーが、家族は永遠であるというレッスンをしてくれました。私はそのレッスンにとっても感銘を受けました。それからというもの、私は祈りや聖典の勉強を始めました。そしてついに、本当だと思える答えを受けたのです。また監督とも話しました。監督は、聖典や祈りの答えが理解できるように助けてくれました。

家族は永遠なのです。

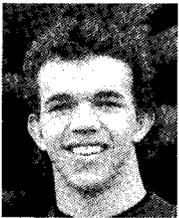


コネチカット州
ダンバリー
ティナ・ミラー
(19歳)

キリストご自身も、ラザロを生き返らせる前に、涙を流されました。マリヤとマルタが愛する人を失って嘆き悲しんでいるところへ、キリストがおいでになり、ふたりと一緒に泣かれたのです。どうしてそうされたのでしょうか。それは、ふたりをとっても愛しておられたので、その痛みをご自分のことのように感じられたからです。

あなたの場合も同じです。主は、あなたの痛みをご存じて、一緒に悲しんでくださっています。

人を慰めることによって、慰めを得られると思います。もしあなたのお母さんが、私の母と同じように感じておられるとしたら、あなたに、肉体的にせよ精神的にせよ、もっと大きな苦しみにある人々を見いだし助けるように望んでおられると思います。



コロラド州
ソートン
アダム・ハリス
(17歳)

私の母は、私が15歳のときに亡くなりました。20年前のことです。あなたの気持ちは私も全部経験しました。怒り(母や天父に対して)、^{しょうそう}焦燥感、孤独感、精神的ショック。どれもが実際感じることです。

母が亡くなってから、家族はだれも

そのことに触れませんでした。私が母の死を受け入れるのに何年もかかったのは、そのためではないかと思えます。あなたのご家族は、お互いの気持ち、悲しみを話し合えるといいですね。あなたのお母さんは今も生きておられます。死んだからといって、すべてが終わってしまうわけではないのです。お母さんはただ、どこか違う所で生きておられるのです。あなたをとっても愛していらっしやることでしょう。

もしあなたのご家族と、お母さんのことを話し合えないなら、だれか話を聞いてくれる人を探してください。励まし合える集まりや、カウンセラー、あなたの話を聞いてくれる友達が見い出せるように天父に祈ってください。

私にとってとても大きな助けになったのは(それがわかったのは随分後になってからのことですが)福音に近くあること、祈り、そして戒めを守ることでした。天のお父様に対する怒りの感情もそのまま受け入れました。祈りの中でそれを話しました。おそらく天父はそういう時期があるのをご存じだったと思いますし、私が自分の思いを洗いざらい出し切って心を整理するのを許してくださっていたのだと思います。思い返すと、あのとき天父の愛で包まれていたのがわかります。悲しみのあまり自分で自分を傷つける私を守ってくださったのです。

あなたはこれからずっとお母さんがいないのを寂しく思うでしょう。平安を見いだすのにも長い時間がかかるでしょう。私も何年もかかりました。でも、私は約束できます。もしあなたが望むなら、平安は必ず訪れます。心が和らぐにつれ、見守られているという温かい気持ちを感じることでしょう。

これからも私は、母がなぜあのときに亡くなってしまったかを理解できないだろうと思います。でもそれはもうどうでもいいことです。大丈夫です。

あなたがうまく乗り切れるように願っています。



ユタ州
ウェストバレーン
ティー
ステファニー・
ランサム(35歳)

皆さんも下記の質問に答えて、この質疑応答を有益なものにしてください。1992年6月1日までに、回答を郵送してください。あて先は次のとおりです。

QUESTIONS AND ANSWERS
International Magazines
50 East North Temple
Salt Lake City, Utah 84150
U.S.A.

氏名、年齢、住所、所属ステータス、ワード部名を明記してください。母国語で書いても構いません。こちらで翻訳いたします。手書きでもタイプでも結構です。できれば写真を同封してください。ただし返却はいたしません。回答が非常に個人的なものである場合には匿名にすることもできます。また、すべての回答が採用されるとは限りませんのでご了承ください。

質問——私の抱えている大きな問題は、物事を引き延ばしてしまうことです。すぐに始めないために、頼まれたことは終わらず、目標は達成できず、約束も守れません。人をがっかりさせるつもりはないのですが、とにかく始めることができないのです。どうしたらよいでしょうか。□

みたまのアンコール

ジェイ・M・トッド

モルモンタバナクル合唱団のヨーロッパ中部とロシアへのコンサート・ツアーは、自由の喜びとみたまにあふれた、人々の記憶に長く残るものとなりました。

語り尽くせないほどの逸話に満ちたこの3週間のツアーは、団員一人一人が人生最良の思い出を胸に残し、1991年6月に終了しました。世界中を驚かせた旧ソビエト連邦の劇的政変の少し前のことでした。

●合唱団が音楽に乗せて福音のメッセージを歌い終え、アンコールも5曲に及んだ後、モスクワのボリショイ劇場の外では初老の男性が街行く人々に向かって大声で叫んでいました。「レーニンの革命が最初なら、タバナクル合唱団は2番目の革命をやり遂げたぞ！」

●ポーランドのワルシャワでは、コンサートの終了後ある女性団員が出会った26歳の女性は、流れる涙をぬぐおうともせず次のように繰り返しつつおやいていました。「信じられない。本当に信じられない。」理由を尋ねられて、彼女はこう答えました。「皆さんは私に今まで感じたことのない何かを与えてくれました。英語では話せません。いいえ、ポーランド語でもこのすばらしさを伝える言葉を知りません。ただただ皆さんに夜通し歌い続けてほしい、朝食を食べて、すぐにまた歌い続けてほしい、そんな心境なのです。」

●チェコスロバキアのプラハにはこのような男性もいました。彼はコンサートの後でゆっくと言葉を選びながら、神への信仰が抑圧され、無神論がはびこる国で生きてきたその胸の思いを話してくれました。「私は38歳です。これから私は、真実とは反対の押しつけられてきた哲学を、38年分捨て去らなければなりません。」

●ハンガリーのブタペストでは、コンサートの後、中年の夫婦が高まる感情に声を詰まらせながら、ある団員に話しかけました。「皆さんに知っていただきたいのです。妻と私も同じように神を信じています。私たちには皆さんの音楽の伝えるメッセージがよくわかります。」

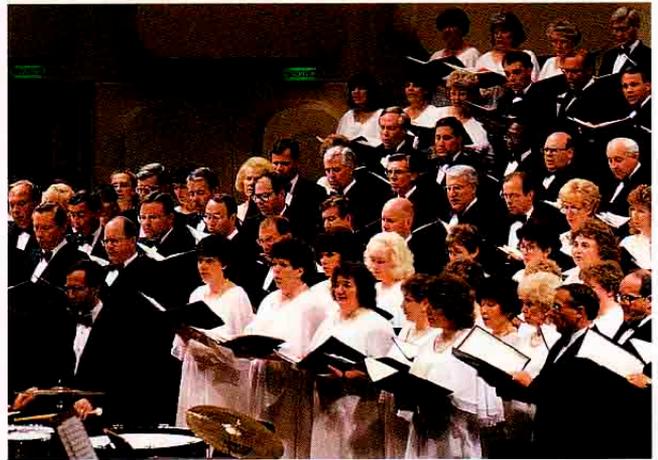
●団員のひとりキャサリーン・ミケルセンも特別な経験

をしました。夜ごと多くの団員が似たような経験をしたのですが、彼女の場合はサンクトペテルブルグ(当時のレニングラード)でのことでした。「コンサートが半ばにさしかかったころ、私の目は観客席のひとりの女性に引きつけられました。彼女の目も私ひとりにくぎ付けになっていました。私たちが『奇しく気高き愛』という十字架上のキリストをたたえた曲を歌っていたときは、彼女の目からそのとろけそうな胸の内がはっきり読み取れました。コンサートが終わるまで私たちはそうして互いを見詰め合っていたのです。私は心からの証を歌に託して、彼女のために歌い続けました。」そして最後のアンコールが終わって団員たちが手を振りながら舞台を降りているとき、キャサリーンとその女性は人の山をかき分け互いを見つけて抱き合い、心と心を通わせたのでした。団員たちは可能な限り言葉での意思疎通を試みましたが、言葉の壁は厚く、むずかしいことが多いのです。そんなときの彼らのコミュニケーションの手段は涙であり、温かみのある長い握手であり、各々の国の言葉で心の底から語られた「ありがとう」の一言でした。

22日間に及ぶこのヨーロッパ横断演奏旅行について語る時、高揚する感情と豊かに与えられた霊的な報いに触れずにこの伝道旅行を形容することは不可能です。確かに団員たちは宣教師の役割を果たしました。伝道の対象になったのは、日ごとあちこちで出会った何千人もの人々であり、各国の首府に建つ棧敷席のあるすばらしい

オーストリア・ウィーンの楽友協会でのコンサートで、団員と共に喝采を受けるモルモンタバナクル合唱団の指揮者ジェラルド・オトリー。





歌劇場やコンサートホールに押し寄せた何万人もの聴衆、テレビやラジオでコンサートを視聴し、音楽に耳を傾けた何千万人もの人々でした。

合唱団はバスと飛行機を乗り継いで4,200マイル(約6,800キロ)を旅しました。訪れた国は8カ国——ドイツ、国境に近いフランスの地方都市、スイス、ハンガリー、オーストリア、チェコスロバキア、ポーランド、旧ソビエト連邦——です。平均1日1回の割合で、合計20回の公演が行なわれました。内訳は正規のコンサートで12回、戸外での短いプログラムで1回、聖餐会^{せいさん}で3回、そして求道者と会員のためのファイヤサイドで4回でした。

その様子は、あたかも主の霊の軍勢が現代に現われ、合唱団と共に国々や町々に歩調を合わせて行進し、夜ごと賛歌を呼ばわって、その声を聞く者たちに「天に鳴り響くは主の時の音、主はわれらの心を震わせん」(賛美歌30番『リパブリック賛歌』)と知らせているかのようでした。

しかし、この演奏旅行では、音楽は(それがもたらした感情的、霊的影響も含めて)この伝道に関連した4つの強力な企画のひとつにすぎないのです。

第1にマスメディアを通しての伝道があります。モルモンタバナクル合唱団が演奏旅行にやって来るというだけで、事前にかかなりのマスコミ報道がなされました。合唱団について様々な記事が書かれました。団員は皆ポランティアであり報酬を受けていないこと、著名な指揮者のジェラルド・オトリーのこと、そしてオルガニストやソロを歌う人たちについても紹介されました。もちろん、合唱団が代表する教会の背景や末日聖徒の信仰とその生活習慣についても数多くの記事が、東側と呼ばれていた国々の新聞、雑誌をにぎわせました。教会広報部から先発隊として派遣されたマイケル・オッターソンとマイケル・オブストは、ラジオ、テレビ、それに各種新聞、雑誌と数えきれないほどの報道機関からインタビューを受け、教会について無数の質問に答える仕事にうれしい悲鳴を上げました。

●典型的な取材の例を挙げてみましょう。ワルシャワではポーランド国営テレビの取材陣が空港で合唱団の到着を待ちかまえていました。団員たちが税関を通っている間に合唱団の役員がインタビューを受け、町に向かうバスの中では団員たちがインタビューされました。ひとたびワルシャワに到着するや、団員も指導者たちも他局のニュースやラジオの報道陣に囲まれ、家族や道徳観に関する教会の基本的な教えについて詳しくインタビューを受けました。

●教会広報部によると、コンサート前に合唱団や教会についてヨーロッパの新聞、雑誌に掲載された記事は、知られているだけでも数百に上るとのことです。コンサート後に書かれた記事に至っては、集計に数カ月、いや1年はかかるだろうと推測されています。

教会が2番目に重視したのは、一連のコンサートそのものです。豊かな音楽と靈性に満ちた2時間のコンサートは絶賛を博し、3回以下のアンコールで終えたことはなく、コンサートごとに平均5回のアンコールに応えました。このアンコールは多くの場合リズムカルな拍手や足で床を踏み鳴らす音、口笛、そして「ブラボー、ブラボー」と叫ぶ歓声となって現われ、2度などは観客が総立ちとなり、最後の団員がステージを降りるまで敬意を表明する拍手が鳴り続けたほどでした。

●合唱団員ディアン・ザーバックはこう語っています。「サントペテルブルグでのコンサートが終わって、私はフィルハーモニックホールの前に出て行きました。そこには大勢の人が立ち去りかねて集まっていました。少しでも手を差し出せば、近くの人が喜んでその手を取って握手をします。それも長い間握って放さないのです。共に語り合える言葉がないため、ただ互いに涙し合ったときもありました。」

●モスクワのコンサートの後には、原子力科学者だという男性が団員にこう話しかけました。「神についての歌はとても気に入りました。ここにいる友人はシベリアの出身ですが、いつ宣教師がシベリアに派遣されるか知り

左——スイス・チューリッヒのハーレンシュタディオ
ン・アリーナで公演した合唱団は、8,400人という合唱
団の公演としては極めて大勢の聴衆を集めた。

右——その前夜、フランス・ストラスブールの音響効果
のすばらしいパレ・デ・コングレで公演する合唱団。

たがっています。」

●同じくモスクワで、団員たちはバスのガイドをコンサ
ートに招待しました。彼女はコンサート中ずっと立ちど
おしで、演奏に聞き入っていました。「完全に演奏に引
き込まれてしまって、座るどころではなかったのです。
これほどの喜びを感じたことはありません。人生で一番
霊的な経験でした。心から感謝します。」

事前のマスコミへの対応とコンサートというふたつの
強調点は、一般大衆に向けられた企画であり、大きな効
果を上げました。対照的に第3、第4の強調点は、選ば
れた少数のグループに向けられたものでした。

教会の霊的なキャンペーンの第3の強調点は、ほとん
どのコンサートの後に催されたレセプション(計6回)と
晩餐会(計5回)でした。ここに招かれた人々はその国の
政府高官と地方自治体の指導者、大使館や領事館の官僚、
教育・科学・芸術・経済各界の著名人と他教派の教会の
指導者たちでした。教会側からは合唱団の団員の一部と
地元の末日聖徒の宗務指導者たち——ステーキ部長、伝
道部長、地方部長あるいは支部長など——が招待客と交
歓しました。教会の意図はコンサートで培った温かい関
係を、地元の教会指導者と国や地方の名士との心の通
った建設的な関係へと結びつけることにありました。

教会の知名度が高く、かなりの数の教会員が住んでい
る地域ではレセプションが催されました。ドイツのフ
ランクフルト、フランスのストラスブール、スイスのチュ
ーリッヒ、オーストリアのウィーン、旧東ドイツのドレ
スデンとベルリンがその例です。反対に晩餐会は、教会
に対するなじみが薄く、会員の少ない国や町で開かれま
した。ハンガリーのブダペスト、チェコスロバキアのプ
ラハ、ポーランドのワルシャワ、ロシアのモスクワとサ
ンクトペテルブルグの町々です。

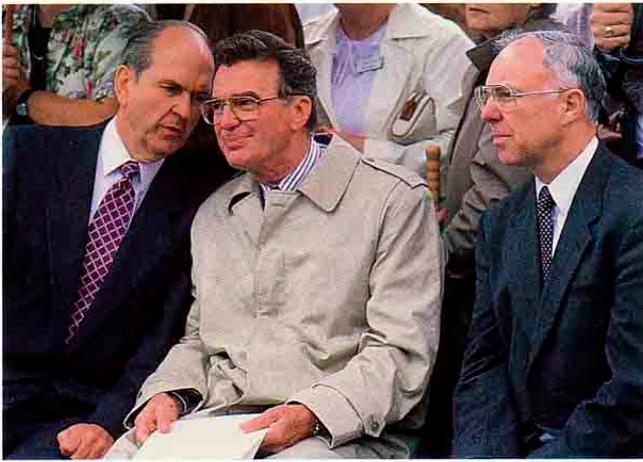
この「公式晩餐会」と称する会を主催したのは、有名
な末日聖徒の事業家や地域社会の指導者たちでした。み
ずから費用を負担することで、招待された政府高官や各
界の著名人に自分たちが宗教に対して、教会の会員であ

ることに対してどれだけの価値を置いているかを示そう
としたのです。この招待者だけのパーティーは、教会広
報部の国際課長を務めるワシントンのビバリー・キャン
ベルが企画したもので、かけ橋を作るうえで大きな成功
を収めました。それによって温かい歓迎とあいさつが交
わされ、記念品が交換され、教会がどのようなものであ
り、何を目的としているかを知らせるのに大きく貢献し
ました。

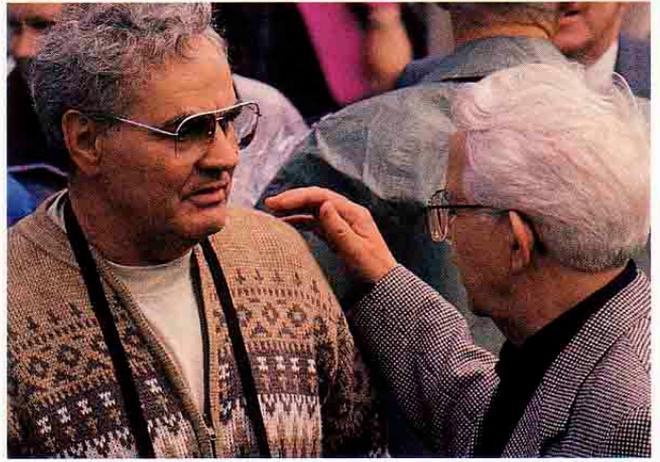
●ブダペストでのコンサート後の晩餐会では、ハンガ
リー国民議会議長があいさつに立ち、「あなた方の教会が
教える真理、つまり自由こそ、今全世界が求めている真
理であると確信しています。合唱団の歌う団結の歌声は
破壊されるべきものでも、破壊し得るものでもありませ
ん」と力強く述べました。

●旧ソビエト連邦の文化相次官は、モスクワでのコンサ
ート後の晩餐会で次のように話しました。「あなた方モ
ルモンとは、禁酒禁煙などの概念に共通点があると強く
申しあげたいと思います。しかし残念なことに、その実
践に関しては私たちはあまり成功しているとは言えませ
ん。皆さんは愛と美という私たちが求めているものをも
たらしてくださいました。教会から派遣されてこのテー
ブルに着いておられる方々と話せば話すほど、私たちの理
想は同じであると確信しました。」

第4に教会が力を入れたのは、みたまの泉のようであ
った4回のファイヤサイド(平均出席者数800人)と、同
じく合唱団の同席した4回の聖餐会で、ここには教会に
ついてもっと知りたいと願う人はだれでも出席できまし
た。そこで地元の教会員や指導者が福音についての証を
述べ、教会の教えを説明しました。その後、ツアーに同
行していた教会幹部の説教がありました。最近までヨー
ロッパにおける教会を監督する責任があった十二使徒定
員会のラッセル・M・ネルソン長老と、当時ヨーロッパ
地域会長会にいた七十人定員会のハンス・B・リンガー、
スペンサー・J・コンディー、アルバート・チョールズ
Jr.の各長老です。



左上——ドイツのフリードリッヒストルフに合唱団員を迎えた直後、十二使徒定員会会員のラッセル・M・ネルソン長老と話すゲルト・シュミット市長。右は、当時ヨーロッパ地域会長会副会長の任にあった七十人定員会のスペンサー・J・コンディー長老。現在はヨーロッパ・地中海地域の会長を務めている。



右上——合唱団員はこうしてコンサートに来場した何千人もの人々に手を差し伸べてきた。

下——雨雲が散ったフリードリッヒストルフのドイツ神殿の敷地内で合唱団を指揮するジェラルド・オトリー。



●ジェームズ・B・キナードはこう語っています。「サントペテルブルグでのコンサートの間、私は聴衆の中のひとりの男性の目を見詰めていました。コンサートの終了後、この男性を探し、翌日夜のファイヤサイドに招待したのです。彼はふたりの息子連れてファイヤサイドに出席し、その後で私と妻をアパートに招待してくださいました。そこで福音について語り合ったのです。彼ら家族は喜んでモルモン経を読み、宣教師の話聞くことを承諾してくれました。別れるときには、妻は彼の奥さんと抱き合っただけを惜しんでいました。」

●「私がナターシャに会ったのは、モスクワでの日曜日の聖餐会プログラムのときでした」と合唱団員のルース・カーは語ってくれました。「彼女は子供が7人いて6週間前に改宗したばかりでした。話をしている最中『彼女を知っている。確かに知っている』という印象を非常に強く受けました。どうしてももう一度会いたかったので、彼女が翌日のコンサートに来ることになっているかどうか確認しました。次の日の夜、合唱団が最後のアンコールに『神よまた逢うまで』を歌った後、彼女は心の高ぶりを抑えきれずに私を探してきました。やっと会えたとき、彼女は『神様があなたを見つけてくださった。会えないかと心配しました』と言ったのです。翌日は演奏旅行の2回目の自由行動の日だったので、会う約束をしました。次の日会うなり、彼女は私にメモを手渡しました。それにはこう書いてありました。『夕べは眠れませんでした。天のお父様に明日は英語が話せるよう祝福してくださいとお願いしました。』その日ふたりは一日中共に過ごしたのです。ふたりとも辞書を片手のやり取りでしたが、本当に楽しい一日でした。その日の終わりに彼女はこう言いました。『あなたは私の最初の友達です』と。それに対して私はこう答えました。『私はあなたがこれからキリストの福音を通して出会うたくさんの友達の、最初のひとりにすぎないのですよ。』」

1991年のモルモンタバナクル合唱団のツアーに関連して教会が力を入れた4つの点——すなわち事前の広報活

動、コンサート、レセプションと晩餐会、そしてファイヤサイドと聖餐会——は、訪れたすべての国々で数えきれないほどの人々に、教会について新たな認識を得させ、好感と理解をもたらして、主のみ業を支える大きな力となりました。

ネルソン長老は、「この教会の大管長会に敬意を表します」と語りました。「これらの国々で最近起こった歴史的な政治改革や壁の崩壊が始まるずっと以前から、タバナクル合唱団のツアーの可能性を探るよう指示を出しておられたからです。私にとってこれは、実に彼らの予言の賜を証明するものです。」

ツアーの知らせは、団員たちにとって、同時に備えの呼びかけでもありました。彼らは言語的にも音楽的にも備えました。12回のコンサートのうち6回は、ドイツ語圏の町で行なわれました。フランクフルト、チューリッヒ、ウィーン、ドレスデン、ベルリン(2回)です。フランス語圏のストラズブルでは1回、ハンガリー語圏のブダペストで1回、チェコ語圏のプラハとポーランド語圏のワルシャワでも各1回、そしてロシア語圏では2回、モスクワとサントペテルブルグでコンサートを開きました。それぞれの国と言語ごとに合唱団は、驚くべき正確さをもって国歌と愛唱されている民謡を学んだのです。加えてヘブライ語による大作も歌いましたし、昨年はモーツァルト没後200年だった関係で、モーツァルトの作品を1曲ラテン語でプログラムに加えることも多くありました。もちろん英語で書かれた作品も歌いましたが、結局彼らが発音を学んだ外国語は8言語にも及んだのです。リハーサルはツアーの何カ月も前から週2回の割で開かれ、ある団員は「個人的な練習と暗記と言葉の発音練習に、これまで注ぎ込んだことのないほどの時間を費やしました」と言います。

霊的な備えも必要でした。スーザン・クリステンセンはこう話してくれました。「合唱団に入って10年になります。様々な演奏旅行にも参加してきましたが、今度はいつもと違う特別な、むずかしいものになると初めから

右——照明の行き届いたチェコスロバキアのプラハにあるスメタナホール。国営放送のための録画撮影が行なわれた。

右端——ドイツ・ドレスデンのコンサートで、エリザベス・バラントイン・エリオットのピアノ、ならびにデブラ・ゲリスとキャシー・パーカーのフルートで独唱するジョアン・サウス・オトリー。

顔

わかっていました。団員は皆靈的に備えるようにチャレンジを受けました。ほかの団員と共によく祈りましたし、聖典も読み、学び、断食もしました。自分がどれほど備えられたかを知るために神殿にも参入しました。皆さんに自慢していると取られたくはないのですが、私たちは主の器として用いられる備えができたと感じました。」

「アルマの願いをかなえられる人って何人いると思いますか」とスーザン・テイトは語ります。「あの聖句ですよ。『ああ、私が天使になって私の心の願いを達することができたら善いものを。私の願いとは出て行って神のラッパのように……。』(アルマ29：1)想像できますか。福音のまだ広まっていない所で主のラッパとして使われ、1億人もの人々に歌いかけることをどう感じるものか。でも備えができていなければならないのです。」

団員たちの主たる目標は、コンサートの後で必ず聴衆にあいさつし、どこにいても人々と交わるように備えを整えておくことでした。「私たちは皆一人一人タバナクル合唱団宣教師として任命されているのです」とケニス・ウィルクスは話してくれました。

これはとりもなおざらず団員各自が、様々な準備に加えて合唱団のカセットテープを数十本、信仰筒条のカードを100枚と、国別に伝道本部の住所、電話番号を載せた宣教師紹介カードを100枚携えてツアーに出かけることを意味しました。専任宣教師同様、これらのテープやカードはすべて団員が個人負担で購入し、それぞれが出会う人々に捧げる奉仕の表われだったのです。合唱団の与えた靈的な衝撃が大きかったとしても、それは当然のことだったのです。324人の団員のうち、ツアーに参加した313人という数は、平均的な伝道部が抱える宣教師数の2倍に相当します。ひとつの町や、コンサート後に聴衆の集う場所へ313人の宣教師と32人のスタッフ(自己負担でツアーに同行した合唱団員の配偶者を含めれば、総勢500人の宣教師)を送り込むのは、世界中の末日聖徒ならだれでもが知る、あの豊かな靈的経験の数々を期待してのことでした。

ジャーナリー・フリーの話です。「ツアーの2カ月前のこと、私はツアー中の聴衆の中にある顔を探すように強い印象を受けました。そこでその顔を見つけられるように祈っていました。そして夢を見たのです。夢の中で人を見たのですが、顔は見えませんでした。しかし、その男性がチェコスロバキア人だという印象が心に残りました。コンサートの度ごとにその顔を探していましたが、プラハでのコンサートの後、プログラムを握り締めて熱心に私を見詰めている男性を見つけました。彼に手を差し伸べるやいなや、彼こそ私が探していた人物であるとわかったのです。彼はあふれる思いを込めて私の手を握っていました。私たちは名前を教え合い、彼はコンサートでこのように感じようとは想像もできなかったと話してくれました。『説明のしようがありません』と彼は言い、私は彼に『合唱団のテープを欲しくありませんか』と尋ねました。テープを受け取るとき、彼は泣いていました。私が宣教師への紹介カードに書き込んでいる間、彼はそのテープを胸に抱き締めていたのです。」

「愛していると彼らに伝えてください」

チェコスロバキアのプラハでのコンサートを終えて、団員のひとりにはスメタナホールの外へ出ました。十代の子供を連れた夫婦に近づき話しかけましたが、言葉が通じません。そのとき、若い男性が通訳を買って出ました。話していくうちに彼はその夫婦が自分の両親であること、自分が交換留学生としてアメリカに行き、教会に巡り会って、改宗したことなどを話してくれました。両親は教会に反対で、その夜のコンサートも半ば強制的に連れて来たのだそうです。しかし、コンサートを聴いている間に「彼らの胸に熱いものが芽生えた」のです。「私たちはその後数分話し合い、それから私は彼の両親に向かい、英語のわかる息子に通訳してくれるように頼みました。



『あなたの両親に、真に幸福になりたいと望むなら教会に入るべきだと伝えてください。福音は真実だということと、私が彼らを愛していると伝えてください』と。みたまが力強く注がれました。彼らは私を抱き締め、キスし、手を握りました。そして宣教師に会うと約束してくれたのです。」

『あなたは使徒なのですか』

「ワルシャワに遠い親類がいますので、合唱団が来ることを知らせておいたのです」とシャーリン・バンワーゲン・ゲールは言います。「コンサート終了後、私は写真を手に彼を探し歩き、やっと見つけました。その夜、彼の家で福音について話し合いました。現代の啓示、教会の回復、それに知恵の言葉についてです。ときどき彼の奥さんのほかに涙が伝いました。使徒や予言者について話し合った後、話の途中で突然彼がこう聞いたのです。『あなたは使徒なのですか』と。『いいえ、弟子です』と答えて使徒との違いについて説明しました。『しかし、あなたはこんなに確信をもって語るではありませんか』と彼は言いました。『私は知っていることを話しているだけです』と答えると、彼は『あなたと話していると、なぜこんな気持ちになるのでしょうか。その理由を知りたいのです』と言いました。そのとき私は、聖霊の働きについて彼に話し、こう尋ねました。『宣教師からもっと詳しく教えてほしいと思いますか。』彼はうなずきました。」

『私は照明係です』

「ハンガリーのブダペストでのコンサートが終わって、私はひげをはやしたふたりの男性に歩み寄りました」と、カイ・リン・ウェークフィールドは語ってくれました。「私はひとりの方に握手の手を差し出しながら、コンサートを楽しんでくれたかどうか尋ねました。彼は私がか



れに話しかけているのかと辺りを見回しました。私が信仰箇条のカードを差し出すと、後ずさりしながら『私は照明係ですよ』と言いました。彼はコンサートの電気技師だったのです。話しかけられたことに戸惑っているようでした。私は喜んで彼に話していることを伝え、照明でコンサートの手伝いをしてくれたことに感謝しました。傍らの友人のことを尋ねると、友人は英語を話せないことと、牧師になる勉強中であることを話してくれました。ここでまた彼は『私はただの照明係です』と繰り返しました。私は彼の腕に手を置き目を見詰めながら言いました。『あなたは神の子で、神はあなたをととても愛しておられます。』そして私たち合唱団が天父と御子イエス・キリストを代表していることを証し、それを英語のわからない友達にも通訳してくれるように頼みました。私の言葉を繰り返すうちに彼はこらえきれずに泣き出してしまいました。まるでドームにすっぽり包まれたように、周りの騒音はもはやまったく聞こえません。私はふたりに、どうすれば宣教師からモルモン経を入手できるかを教えました。友人の神学生も明らかに感動し、モルモン経を読むと約束したのです。」

『ジョセフ・スミスの名前を口にした途端』

次はアン・ハルバーセンの話です。「ボリショイ劇場でのコンサートの前のことです。だれかに腕をつかまれました。『モルモンについてもっと教えてくださいませんか』とその女性は頼みました。英語が話せますか、との私の問いに彼女は『はい』と答えました。私が『クリスチャンですか』と尋ねるとそれにも『はい』と答えました。『復活されたイエス・キリストがアメリカにみ姿を現わされたのはご存じですか』と私が聞くと、『本当ですか?』と目を輝かせて叫びました。それから、私はモルモン経について手短かに説明しました。私はみたまに感じてジョセフ・スミスがモルモン経を入手するに至った経緯を話し出しました。ジョセフ・スミスの名前を口に



左上——ドイツ・ベルリンのシャウシュピールハウスで喝采を受ける合唱団。

右上——ベルリンのコンサートでは、オルガニストと合唱団の一部はステージの上の2階席で公演した。



下——団員はコンサートの観客と交歓し、それぞれの国の言葉で書かれた信仰箇条のカードを配った。教会についてももっと知りたいと望む人々のために、多くの宣教師の紹介カードも記入した。



た途端、みたまがあまりにも強く、私は泣き出してしまいました。みたまを強く感じて彼女も声を詰まらせました。そして、彼女が涙ながらに『この胸に感じているものは何なのでしょう』と尋ねたので、私は聖霊について説明しました。その瞬間彼女は私をさえぎり、こう言ったのです。『これこそ私が探し求めていたものです。』その夜のうちに私は彼女を宣教師に紹介することができました。」

「その本をください」

これはウィルマ・S・リブシーの経験です。「私はツアーの間中、ロシア語のモルモン経を持ち歩いていましたが、ツアー最終日の土曜になってもまだ手元に残っていました。私はなぜもっと早くだれかに渡せなかったのかと考えていました。サンクトペテルブルグのホテルで朝食に行こうとしたとき、ロシア人通訳者の若くて美しい女性が階段を昇って来ました。彼女は私に帰国の準備ができたかと聞いたので、私は『いいえ、まだ。このモルモン経の行き先が決まらないのです』と言ってモルモン経を見せました。すると彼女は自分が欲しいと言うのです。私は驚いて『この本はとても特別な人を待っているのです。どうしても、その人に渡さなければいけないんです。その人のために東ヨーロッパ中を持ち歩いたのですから』と断りました。が、彼女はその本が欲しいと繰り返すのでした。『でもこの本を読んでもくれる人にもらってほしいのです。ロシア語なのです』と言うと、熱心に『ロシア語は読めます。必ず読みますから。その本をください』と言う彼女の目には涙があふれていました。『今すぐにでも読みたいのです。』そう訴える彼女に、私はモルモン経を手渡しました。キリストの第一の証である聖書に並び、モルモン経がもうひとつの証であると説明しました。そしてモロナイ書にある約束を話し、彼女がモルモン経を読んで祈って見たときに、私と同じような気持ちになったら、宣教師と連絡を取るようにと言

いました。伝道本部の住所が書いてあるカードも渡しました。涙がふたりのほほを伝い私たちは抱き合いました。『この本が欲しいのです。必ず読みます。』彼女はもう一度繰り返しました。」

話はこれだけではありません。人生最良の話がまだまだあるのです。

「自分の力以上のものを感じたこの気持ちは、二度と経験できないもののような気がします」と話すのはトム・ロジャーソンです。「合唱団があれ以上のコーラスをした記憶はありません。わが人生の最も霊的で感動的な、胸躍る、しかも心身共に消耗する経験でした。特に東側の国々やロシアでは、コンサート半ばにしてやっと、聴衆が私たちと目を合わせてほほえんでくれました。コンサート終了後は、共に涙を流し合ったのです。」

マーシャ・アリーの感想はこうです。「多くの合唱団員にとっては大変困難な旅でした。主はしばしばむずかしいことを私たちに望まれて、それに従うためにたくさんの努力も払いました。しかし、求められていることを果たしたときには祝福が与えられます。歌手にとってもだれにとっても、半日以上にわたる移動時間の後で、その夜に2時間のコンサートをこなし、5、6時間の睡眠の後に翌朝また大きな荷物を運んで次のホテルに移動し、飲食物に注意して、健康でいつも歌える状態にしておかなければならないのは、かなり過酷なものです。こういうことを喜んでするのは献身的な末日聖徒だけでしよう。でも、必要な犠牲を喜んで捧げるとき、気がつくともみたまに満たされているのです。夜を徹しても歌えるような気がするのです。このようなツアーに参加して、その背後におられる方への証を得ずにいることなどあり得ません。」

ある団員はこう語りました。「私は望んでいたことをすべて成し遂げました。毎夜コンサートで私は2時間にわたって証ができました。聴衆に自分の持っているものすべてを与えたのです。すべてです。」□



「このツアーは 主が望まれたものです」

モルモンタバナクル合唱団の理事であるウェンデル・M・スムート兄弟は、1991年4月29日、事務局で同年6月8日に出発を控えたヨーロッパ中部とロシアへのコンサート・ツアーについて話してくれました。

ツアーはまだ始まっていなかった

ものの、スムート兄弟はすべてが順調に進み、ツアーが成功すると確信していました。

「信じられないような話をお聞かせしましょう。」スムート兄弟はそう切り出しました。「このようなツアーでは慣例なのですが、目的のま

での航空券や公演するホール、510人からの人が宿泊して、食事の用意ができるホテルを事前に予約しなければなりません。また支払いも期限が定められていることが普通で、ときには予約金をかなり支払うこともあります。1991年2月7日は相当額の支払い期日で、大変重要な日でした。1月下旬、私は非常に心配になっていました。

そのころ世界でどんな事件が起きていたか、皆さんも覚えておられるでしょう。イラクへの空襲は1月16



日に始まりましたし、地上戦は避けられないとの見通しでした。ヨーロッパの全域でテロと誘拐が横行し、だれもが恐れをなしていました。個人も団体も戦争拡大の恐怖のために、様々な企画をキャンセルしている時期でした。契約の相手方の人々は私たちがキャンセルするのではないかと、心配していたのです。

私は、2月1日の金曜日に、直接の上司であるゴードン・B・ヒンクレー副管長に電話を入れました。私が、『副管長、お目にかかりたいの

ですが』と言うと、『いいでしょう、おいでください』と言われました。

私は副管長のオフィスまで出かけ、状況を詳しく説明して、こう言いました。『副管長、もし予定をキャンセルして戦争がすぐに終わるようなことになれば、教会の評判は地に落ちます。頼み込んでやっとコンサートホールを予約し、プロモーターまで得たのに、その契約を履行しなければ、どう思われるか想像に難くありません。反対に、やみくもに出かけて行って、団員と彼らの生活と家

ポリシヨイ劇場でのコンサートに向かう途中、モスクワにある赤の広場のワシーリー大聖堂の前で歴史的な記念写真を撮る合唱団員。

族を危険にさらすことも悲劇的な結果を生みかねません。大管長会がこのツアーをキャンセルする考えを多少でもお持ちになる可能性があるようでしたら、2月7日の木曜日には

高額の支払いをすることになっていきますので、今すぐにもそうおっしゃっていただきたいのです。副管長、私は助言がいただきたいくて参ったのです。』

週末が過ぎ、月曜の朝に再び電話を入れて尋ねました。『副管長、金曜日にお話しした件について大会長会で結論が出ましたでしょうか。』

ヒンクレー副管長はこう言われました。『ウェンデル兄弟、あなたがここに来てからほかのことはほとんど考えられませんでした。』そして、

少し間を置いて次のように続けられたのです。『これははっきり言えません。合唱団はこの夏ヨーロッパに行くことになるでしょう。戦争はそれまでに終わります。』

『それだけ伺えば十分です。』私はそう答えました。この会話が終わると、私は金銭上の債務を果たすべく然るべき措置を取り、準備を予定どおり進めました。

2月4日のことでした。しかしあの痛ましい戦争の地上戦が始まったのは2月24日でした。それが2月28

日にはもう停戦に至ったのです。

しかし、ヒンクレー副管長との2度の会話により、このコンサートツアーはまさしく主によって定められたものであり、主が望まれたものであることがわかりました。主は私たちが行くことを望まれており、主の召しであるが故に私たちは行くことができ、守られ、成功を取めるに違いないのです。』

このインタビューは、タバナクル合唱団の出発予定日の40日前に行なわれたものです。□

公演地域での教会の発展状況

ドイツ——会員数3万6,000、ステーク部16、神殿2(フランクフルトとフライブルク)。この統計にはドイツ民主共和国と呼ばれていた旧東ドイツ領内の約4,500人の会員も含まれている。

フランス——会員数1万8,100、ステーク部5。合計2万4,000人のフランス語を母国語とする会員が、フランス、スイス、ベルギーといったヨーロッパのフランス語圏に住んでいる。

スイス——会員数6,500、ステーク部3、神殿1(ゾリコーフェン)

ハンガリー——会員数400、地方部1。

オーストリア——会員数3,500、ステーク部1。

チェコスロバキア——会員数400、地方部1。

ポーランド——会員数200、地方部1。

ロシア——会員数300(うち100人は西部に位置するエストニアに住む)。□

ポーランドで最初の末日聖徒の礼拝堂であるワルシャワの教会堂の緞入れ式が1989年6月15日に行なわれた。ポーランド最初の伝道部は1990年7月に開かれ、初のポーランド人宣教師はユースラ・アダムスカで、アメリカのワシントン州タコマ伝道部に召された。



ツアー・ドキュメント

● 6月10日月曜日、ドイツ・フリードリッヒスドルフ、フランクフルト もし合唱団員の中でツアーの成功を心配するあまり、すべてうまくいくという確証を望む者がいたならば、この日フリードリッヒスドルフ郊外にあるフランクフルト神殿の芝生の上で行なわれたツアー最初の「コンサート」で、願いはかなえられたのです。12時30分に始まる予定だった20分間の短い屋外「コンサート」は、ひどい霧雨のために何分か遅れたものの、500人の市民の見守る中、公演責任者はゲルト・シュミット市長とラッセル・M・ネルソン長老のあいさつを皮切りに会を進行させる決定を下しました。雨はまだ降り続いていました。合唱団が「アレルヤ」を歌い始めました。歌詞がたったひとつの言葉——「神をほめよ」という意味のアレルヤ——で構成され、その言葉が65回繰り返されるという曲目です。歌い始めてものの1分もたたないうちに雨がやみました。数分後、風が雲を散らし、青空が現われ、日の光がさしてきたのです。フランクフルトのある新聞の見出しには、こう記されていました。「アレルヤコーラス、雨を止める」その夜フランクフルトの豪華なアルテオペル劇場でのオープニングコンサートは、2,250人の聴衆を前に4度もアンコールにこたえるというすばらしい大成功を収めたのでした。

● 6月13日木曜日、スイス・チューリッヒ タバナクル合唱団は火曜の夜にフランスのストラスブールで、優れた音響施設を持つパレ・デ・コングレ劇場で2,000人の熱狂的な聴衆を前にしてコンサートを終えたばかりでした。一転して今夜はハーレンシュタディオンというホッケー競技や馬術ショーが行なわれ、有名な音楽家もたびたび演奏するという屋内スタジアムで歌うのです。8,400人の聴衆が詰めかけたこの広大な競技場では313人の声をもってしても会場全体に歌声を響きわたらせることはできませんが、美しいみたまがそこには感じられました。舞台から遠く離れている人々も席にくぎ付けになっているかのようです。今夜の満員の聴衆は特別注目に値するものです。ツアーのそのほかのコンサートがすべてロンドンにあるスペシャライズドトラベルという会社

が契約し、各都市のプロモーターが後援したのとは対照的に、このコンサートだけは教会員の要請により会員自身の手で契約、後援されたものだったからです。

● 6月14日金曜日の朝 ある教会員が前夜のコンサートのお礼にと、各団員にキャンディをひと袋ずつ差し入れてくれました。合唱団員は袋を開けずにポーランドとロシアまで持参し、子供たちに配ることに決めました。

● 6月15日土曜日、ハンガリー・ブダペスト 元共産党支配下にあった東側の国で初めてのコンサートが1,400人の聴衆を集めて、昔ながらのオペラハウスで今夜開かれます。ツアーの性格が大きく変わるの今夜です。「みたまが今夜は特別強く感じられます。まるで手を伸ばせば触れるような気がします」と、ある団員は述べました。しかしそれは、感動で体力が消耗し、霊的には天にも昇るような数々の夕べの先駆けとなる最初の夜だったのです。今夜のコンサートでは、公演中に「ミュージック・アンド・スポークン・ワード」(毎週日曜日放送の合唱団の番組)の収録も行なわれました。誇り高いハンガリー人の聴衆は、この放送が世界中に流れることを知っていました。同様の収録は、この後、旅行中に2回行なわれることになっています。

● 6月16日日曜日 合唱団の聖餐会で、東側諸国とロシア共和国における福音の種まきについてのネルソン長老の詳細な説明に、団員は感激しました。

● 6月17日月曜日、オーストリア・ウィーン 今夜はブラームスやそのほかの音楽の大家の故郷、楽友協会で、2回目の「ミュージック・アンド・スポークン・ワード」の録画撮りが行なわれました。大勢の聖徒を含む2,000人の聴衆は、6度目のアンコールを終えても拍手をやめようとしません。コンサートを中継した「ORF-SAT 3」というテレビ局の役員によると、今夜のように観客が総立ちしての喝采はここ楽友協会では稀有のことで、過去に2度しか記憶にないということです。

● 6月18日火曜日、チェコスロバキア・プラハ 再び霊性に富んだコンサートが、今度は東側としては2番目の国にある、ここスメタナホールカフサイの1,300人の聴衆の目前



左上——ハンガリー・ブダペストのオペラハウスでの記者会見。合唱団はどこでもニュース記事の格好の取材対象であった。加えて、合唱団のコンサートはラジオやテレビを通じて数千万の家庭へ放送された。合唱団と団員の証を紹介した30分間の特別番組は、ロシア共和国だけでも推定人数1億の視聴者を獲得した。写真右のブダペ



ストのパーラメントホールはコンサート後の交歓会にはうってつけのエlegantな場所。

右ページのベルリンの宣伝ポスターは、合唱団のコンサート用広告としては典型的なものである。

で行なわれています。合唱団員、聴衆共に忘れることのできない思い出となったのは、最初のアンコール曲の演奏のときです。曲はチェコの民謡「テッシ・ヴォラ・テッシ」です。この歌はなかなか手に入れることのできない自由と解放について歌ったもので、チェコの歴史上人民の反抗を引き起こすものとして、独裁者によって演奏を禁止されていた時期もたびたびありました。共産勢力の衰退後この歌はもはや禁止されてはいないものの、この夜合唱団がコンサートで歌うのはかなり大胆なことでした。ソビエト軍兵士はまだチェコスロバキアから全面撤退していなかったのですから。

聴衆の反応は絶大でした。合唱団の歌声を除けば会場は物音ひとつしない静けさでした。聴衆の3分の1以上は立ち上がり、かろうじてこらえている人もいましたが、多くの観客は目に涙を浮かべて、ある者は手を高く上げて、歌詞とメロディーを体中で受け止めていました。

コンサート終了後、チェコテレビの役員はスメタナホールで観客が総立ちになっての喝采の場に居合わせたのは、初めてのことだと教えてくれました。

●6月19日水曜日、ドイツ・ドレスデン 移動の途中、合唱団の一行はドイツ・フライブルク神殿の敷地内で昼食を取るため回り道をしました。ヘンリー・ブルックハルト神殿長は団員たちにこう話してくれました。「フラ

イブルクの市民がこの神殿を『私たちの神殿』と呼ぶようになるのに、大して時間はかかりませんでした。会員でない若いカップル——結婚の準備をしている人たちや、すでに結婚しているカップルが、神殿を背景に自分たちの写真を撮りに訪れるのは珍しくありません。彼らは神殿の中に入れないことは知っています。しかし、神殿が永遠の結婚と愛のシンボルであることを多少なりとも理解しているのです。この地でみたまを感じているのです。」

今宵のコンサートは、1989年11月9日にベルリンの壁が崩壊する以前に東ドイツ(ドイツ民主共和国)と呼ばれていた場所での最初のコンサートです。ここクルチュールパラストでは2,400人の聴衆がツアー始まって以来、初めてのことをしました。最後のアンコールが終わって5、6分の間、最後の団員がステージを降りるまで拍手が鳴りやまなかったのです。聴衆と団員たちはその間、別れの手を振り続けたのでした。

●6月20日木曜日、ドイツ・ベルリン 疲労の激しい団員たちはみたまと愛、思い出を活力源に、午後と夜の2回のコンサートをこなしました。コンサートはきらびやかに修復され、かつての共産主義者たちが誇りとしたシャウシュピールハウスで行なわれました。今夜はここで1,500人の聴衆が足を踏み鳴らしてにぎやかな喝采を送

右のサンクトペテルブルグのフィルハーモニックホールでは、8カ国、4,200マイルにわたるツアーの最終コンサートが行なわれた。このツアーの費用は合唱団のレコードの印税、コンサート報酬、ならびに寄付金によって賄われた。

りました。この夜はまた二重の喜びで、出席した人たちにとっては忘れられない夜となりました。それは、合唱団の副理事で昔(1953年-1957年)東ドイツの伝道部長を務めたことのあるヘロルド・グレゴリーがマイクに向かったときでした。彼は聴衆に別れのあいさつを述べ、ドイツ議会の下院「連邦衆議員」が数分前、議会の各組織とドイツ首相の地位、内閣をボンからベルリンに移すことを決議したと発表したのです。聴衆は耳を聳するばかりの歓声で応えました。

● 6月22日土曜日、ポーランド・ワルシャワ あふれる感動とみたまに再び満たされた夜でした。自由が回復されていなかったら、このようなことは決してなかったでしょう。午後3時30分にはワルシャワでポーランド初の末日聖徒の礼拝堂が献堂されました。こうした「宗教的な主導力」の発露は、自然と報道陣の高い関心を集めることになりました。

● 6月24日月曜日、ロシア・モスクワ 今宵ボリショイ劇場では2,400人の聴衆が1階と5層の栈敷席を埋める中、3回目の「ミュージック・アンド・スポークン・ワード」の収録が行なわれました。旧東側諸国のコンサートと同様、ここでも多くの人が感動的な夜を過ごし、希望と主のみたまが強く感じられた一夜でした。

最初のアンコール曲、「ゴスポディ・ポミルィ」(「主よ、我らに慈悲を垂れたまえ」の意)を歌い、この言葉が77回繰り返し歌われると、多くの人々の目には抑圧のシンボルとして映ってきたこの国で、国全体が懺悔の祈りをしているかのようでした。合唱団の情感あふれる嘆願の歌声は、全聴衆を感動させずにはおきませんでした。

コンサート後催された晩餐会で、ロシア共和国の副大統領は、ひと月足らず前の5月28日に、ソビエト連邦15共和国中最大のこの共和国全域で、この教会が正式に承認されたことを発表しました。「ロシア共和国全域」というのは旧ソビエト連邦の4分の3にわたる国土を意味し、そこには1億5,000万人の国民が住んでいるのです。

この日、合唱団一行に加わったのは、十二使徒定員会

のダリン・H・オークス長老でした。ジョン・M・ハンツマン兄弟と100人以上のユタ住民が、アルメニア大地震で家を失った人々の家屋の建築に用いるハイテクコンクリート製造工場の奉献式のために来ソしており、この日やはり合唱団一行に加わっていました。教会の地震被災者への援助に感謝したアルメニア・ソビエト社会主義共和国から、首都エレバンにある1区画の土地が教会に寄贈され、十二使徒のラッセル・M・ネルソン長老とダリン・H・オークス長老、ならびに七十人定員会のハンズ・B・リンガー長老が謝辞を述べました。この土地には、様々な事務所や教会の集会所、アルメニア人に住宅建設を指導するボランティアの居住施設など、多目的に使用できる建物が建設される予定になっています。

● 6月27日木曜日、ロシア・サンクトペテルブルグ どのようにすれば感動の渦と霊的な機会、すばらしい音楽による高揚がこれほど持続するものなのでしょうか。今夜も涙ながらに喝采を送る聴衆のために、6曲のアンコール曲が歌われました。聴衆と団員が胸の締めつけられるような思いで互いに手を振り、最後の団員が舞台を去るまで拍手が鳴りやまなかったのはこれで2度目のことです。

「すばらしい! まったくすばらしい! 霊的だ! 霊的だ! レニングラードに喜びが帰ってきた! きょうを祝え!」と強いロシアなまりのある英語でひとりの男性が叫んでいました。これで全コンサートが終了しました。しかしもう1日、新しく親交を結んだロシア人の友人を訪れ、合唱団の歌とロシア人改宗者の証でつづる最後のファイヤサイドが、明日に残されています。ネルソン長老が次のような言葉で合唱団の労をねぎらっていました。「皆さんは私たちが望んでいたすべての点で、申し分のない成功を収めてくださいました。」□

*ジェイ・M・トッド兄弟——教会機関誌「エンサイン」編集主幹。





昨年、モルモンタバナクル合唱団はソルト
レークシティをたち、ヨーロッパ中部か
らロシアにかけてコンサートを行なった。
福音の精神に満ちたその歌声は、多くの
人々の心を魅了した。写真右の姉妹のよう
に、団員たちは聴衆や道行く人々にも証を
伝えた。(本文「みたまのアンコール」p.
32参照)

「人がもし死ねば、 また生きるでしょうか」

(ヨブ14:14)

アジア北地域会長会第二副会長

サム・K・島袋

何年も前、私が監督だったころのことです。深夜、ワード部のある会員から電話があり、すぐ病院に来てほしいと言います。車で駆けつけると、すでに家族全員がそろっていました。皆、涙に暮れています。母親が亡くなったばかりだったのです。遺体の安置された部屋に入ると、後ろから来たご主人が、目に涙を浮かべ、妻を生き返らせてくれと切々と私に哀願するのです。私は当惑しましたが、「私はただの人間です。奥さんを生き返らせることなど到底できません。死者をよみがえらせることができるのは、イエス・キリストだけです」とやさしく言い含めました。

その後、この兄弟と話をし、慰め励ます機会を幾度も持ちました。その度に、死が夫婦の関係を断ち切るものではなく、再会できることを理解してもらえるように努力しました。心からイエス・キリストを信じ、その使命と人生の目的を理解すれば、死は苦しくも、受け入れ難くもないのだと話しました。しかし、彼が奥さんと再会し、永遠の夫婦関係を心から望むなら、代償を払わなければなりません。その代償とは、主と交わした誓約と神の律法、戒めを守り、終わりまで耐え忍ぶことです。

「私はただの人間ですから、姉妹を生き返らせることなど到底できません」という私の言葉は、紛れもない事実です。この言葉と、ラザロが亡くな



ったとき姉妹のマルタに言われたイエスの言葉を比較してみましょう。イエスはこう言われました。「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。」そしてご自身が死者も生者も生かす力を持っていることを確かに示すために、「また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない」と、はっきり宣言されました。(ヨハネ11:25, 26)主がマルタに語られた言葉も、紛れもない事実であり、み言葉どおり私たちが死からよみがえらせてくださることに、完全な信頼と信仰を寄せることができます。

残念ながら、いまだに大勢の人々がイエスとその神聖な使命を知らずに、昔からある次のような疑問を抱いています。「人がもし死ねば、また生きる

でしょうか。」(ヨブ14:14)このような疑念のある人々は、恐れと不安に悩まされているに違いありません。心の奥底にあるこの恐れと不安が、彼ら自身何より願ってやまない、真の幸福と平安を阻む障害となっているのです。

もしキリストを知らないか、今はまだ主を受け入れていない人々が、皆熱心に学び、主を信じて主に従おうとあらゆる努力をするならば、すでに主を知り、信じている数多くの人々と共に教えられ、一片の迷いもなく、声を合わせてこう宣告することができるのです。「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、末の日に彼は必ず地の上に立たれる。わたしの皮のうじがこの体を滅ぼしたのち、わたしは肉にあって神を見るであろう。しかもわたしのこの目で見るであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない。わたしの心はこれを望んでこがれる。」(欽定訳ヨブ19:25-27)

末日聖徒イエス・キリスト教会の会員の使命のひとつは、このような人々がキリストのみもとに来て、主を信じ、主こそが「道であり、真理であり、命である。だれでも〔主〕によらないでは、父のみもとに行くことはできない」と知ることができるように助けることです。(ヨハネ14:6)「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされる」(Iコリント15:22)

JMTC 新所長召される

ハリソン・テッド・プライス所長ご夫妻



妻のラモーナ・カルバート・プライス姉妹は、ユタ州グリーンビルで、アーサー・O・カルバート、エマ・ウィリアムズ・カルバート夫妻の間に生まれた。正看護婦としての職業を持ちながら、プライス姉妹は教会で地方部宣教師、扶助協会副会長、初等協会会長などの責任を歴任し、最近まで夫と共にジョーダンリバー神殿で奉仕していた。

プライス長老夫妻は、5人の子供に恵まれている。□

日本宣教師訓練センター所長として、井上龍一所長に代わって、新たにハリソン・テッド・プライス所長が召された。プライス長老は、以前に日本で専任宣教師および伝道部長を務めている。

アイダホ州アトランタ出身のプライス長老(66歳)は、ヘンリー・H・プライス、ララ・バックリン・プライス夫妻の間に生まれ、第二次世界大戦後に日本で初めて伝道した7人の宣教師のひとりである。ユタ州マレー出身。合衆国司法省の極東地域入国管理・帰化業務地区ディレクターを退職している。

プライス長老は1976年から東京伝道部伝道部長に召されたが、1978年に同伝道部は分割され、長老は引き続き東京北伝道部伝道部長を1979年まで務めた。長老はこれまで、副監督、地方部宣教師などを歴任し、最近までユタ州ジョーダンリバー神殿で結び固めの儀式執行者を務めていた。

東京神殿に新神殿長召される

ハワイ・マウイ島ワイルク出身のウォルター・繁雄・照屋^{アルヤ}長老(76歳)が、この度友末・安保^{トモスエ アボ}神殿長の後任として、東京神殿神殿長に召され



ウォルター・繁雄・照屋神殿長ご夫妻

た。安保神殿長は病状が思わしくないため解任となった。

照屋神殿長は、代理販売業を営んでいたが、現在は退職。1950年にはハワイ伝道部長会の一員として、日本では1974年から仙台伝道部初代伝道部長、1983年から1984年には東京神殿副神殿長として働いてきた。日曜学校教師や支部長の任にもあった。

ジョイス・利根・永澤・照屋姉妹は、神殿長夫人として東京神殿で介添えの職を果たすことになっている。照屋姉妹はこれまで、ステーキ部の初等協会や扶助協会で管理会会員を務め、ワード部でも初等協会や日曜学校の教師を務めてきた。□

という事実を理解し、受け入れる人々はなんと祝福されることでしょう。

キリストを通して、「死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」(Iコリント15:55)と誇らしく語れることに、喜び感謝するのはよいことです。しかし、死の縄目からの解放には、より神聖な目的があることを忘れてはなりません。父なる神は、「これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり」と教えておられます。(モーセ1:39)

不死不滅、すなわち終わりなく生きる力は、人に与えられたキリストからの無償の賜です。一方、永遠の生命は、正しい生活、そしてイエス・キリストの福音の律法と戒めと儀式への従順によって勝ち得なければならぬ賜です。そのようにするとき、私たちは天父の豊かな賜として、不死不滅の上に栄光と昇栄の冠を受けることができます。次の主のみ言葉を心に深く刻み込む必要があります。主は、「見よ、永遠の生命を有つ者は富めるなり」(教義と聖約6:7)、そして「もし汝善を行わんと欲し誠に終りまで変ることなく忠信ならば、神の王国に救われるべし。こは、神の賜のうち最大なるものなり。およそ、救いの賜に勝る賜はあらざればなり」(教義と聖約6:13)と教えておられます。

不死不滅への門を開いたイエス・キリストの復活を記念し祝うとき、狭くて細いもうひとつの門も思い起こさなければなりません。主は私たちがその門をたたき、開けて中に入るように望んでおられます。しかし、「その門を守る者はイスラエルの聖者」であり(IIニーファイ9:41)、「低くへりくだるのでなければ、神はかれらに門をお開けにはならない」(IIニーファイ9:42)ことも心に留めてください。私たちは皆、自分が永遠の命に続く門の鍵を持っていることを知っているはずで、門をたたいて鍵を差し込むときに、それがぴたりと合って、「主人と一緒に喜んでくれ」(マタイ25:21)という待ち望んだ主のみ言葉を聞くことができるように祈っています。

□

ロシアとウクライナに 伝道部創設

大 管長会は、ロシアとウクライナに3つの伝道部を創設すると発表した。これは、独立国家共同体(旧ソ連)に拠点を確立するうえで最初の伝道部となる。

この新しい伝道部は、ロシア・モスクワ伝道部、ロシア・サンクトペテルブルグ伝道部、そしてウクライナ・キエフ伝道部であり、ともに2月3日から活動を開始した。

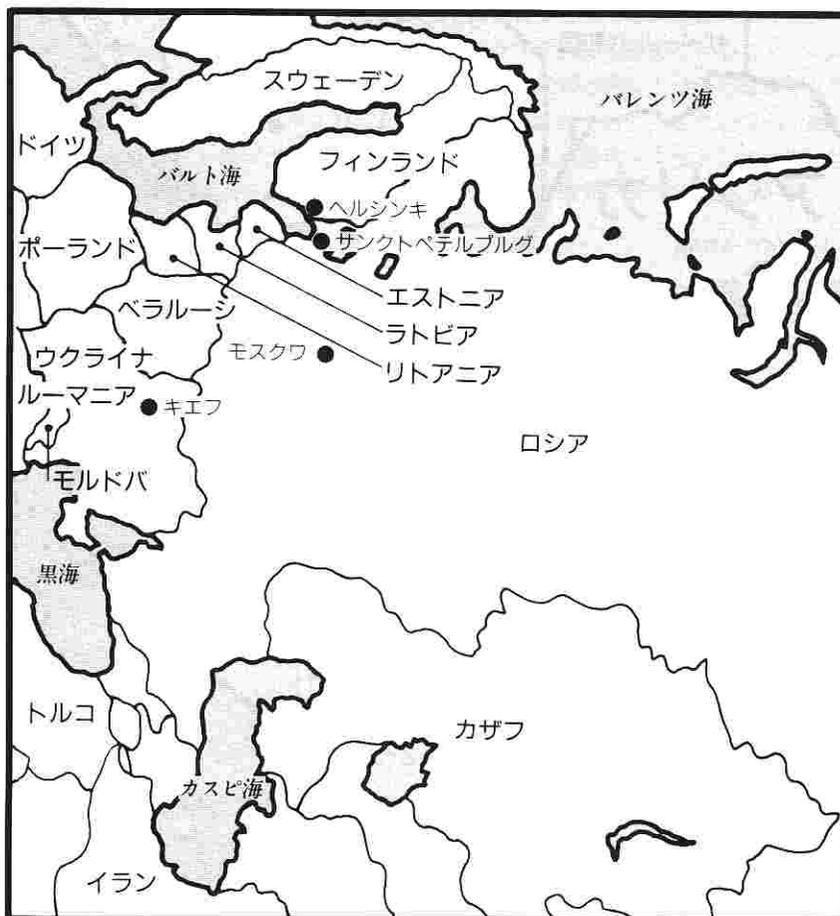
ロシア・モスクワ伝道部を管理するのは、前フィンランド・ヘルシンキ東伝道部伝道部長のゲイリー・L・ブラウニング伝道部長である。現在、同伝道部には30人の宣教師がおり、モスクワとその周辺地域で生活する約1,150万人のロシア人に奉仕している。

ロシア・サンクトペテルブルグ伝道部は、チャールズ・H・クリール伝道部長が管理する。クリール伝道部長は、オーストリア・ウィーン東伝道部の専任宣教師として夫婦で働いていたときに、この召しを受けた。同伝道部には現在41人の宣教師がいて、ロシア北西部とエストニアに住む1,000万人の人々に奉仕している。

ウクライナ・キエフ伝道部を管理するのは、前オーストリア・ウィーン東伝道部伝道部長のハワード・L・ピダルフ伝道部長である。同伝道部では、現在35人の宣教師がウクライナ全域の人々のために奉仕している。

大管長会は、新伝道部の発表とともに、フィンランド・ヘルシンキ東伝道部と、オーストリア・ウィーン東伝道部の閉鎖を発表した。

教会の公式声明によると、今回の伝道部創設は、昨年、教会がロシアから承認を受け、ウクライナの首都キエフでも同様の承認が得られたことによる。(「チャーチニュース」1992年2月15日付)



アフリカで3カ国が奉献される

先 ごろ、アフリカの3つの国が、福音を宣べ伝え、教会を確立するために奉献された。

十二使徒定員会のジェームズ・E・ファウスト長老は3日間にわたって、ウガンダ、ケニア、およびジンバブエで奉献の祈りを捧げた。

1991年10月23日、ファウスト長老は、七十人第一定員会会員であり、アフリカ地域会長会会長でもあるリチャード・P・リンゼー長老と共に、ウガンダを訪れ、首都カンパラでこの地を奉献した。ファウスト長老とリンゼー長老はそれぞれ、妻のルース・W・ファウスト姉妹、マリアン・B・リンゼー姉妹を同伴し、ケニア・ナイロビ伝道部のラリー・ブラウン伝道部長も妻のアリス姉妹と共に出席した。

ウガンダでは昨年初め、教会が正式に承認されている。ウガンダでの奉献の祈りの中で、ファウスト長老は次のように願いを求めた。「この地に住む天父の子供たちが良心に従って礼拝できるような、人種や宗教による差別のない平和な社会としてください。宗教の自由が政府によって認められ、促進されますように。……信仰のあつこの地の聖徒が、まだ受けていない儀式、誓約にあずかることができますように。……この地と世界中の信仰のあつ姉妹たちの上に特別な祝福がもたらされますように。」ウガンダの教会員の一行は、庭園とカンパラ市を見渡せる丘の上で行なわれた午後の式に出席した。

カンパラ支部のチャールズ・オシンデ支部長が式の司会を務め、またウガンダの最初の宣教師ラク・W・ウォッシュバーン長老と妻のアーリア姉妹も出席した。

翌10月24日、ファウスト長老夫妻、リンゼー長老夫妻、ブラウン伝道部長夫妻はケニアのナイロビを訪問した。ナイロビの教会堂の近くには、野外での式に参加するために100人以上の教

員が集まった。アフリカの太陽が沈み満月が昇る中、奉献の祈りは捧げられた。奉献式の司会はケニア地方部長ジョセフ・シタチ兄弟が務めた。

奉献の祈りの中でファウスト長老は次のように述べた。「この地は祝福された地です。」そしてケニアの美しさ、雄大さ、また豊かな動植物について触れ、「この地に古くから繁栄してきた野性の動物が、これから後もこの地で生息できますように」と願いを求めた。

さらにファウスト長老は、この地のすべての人々が互いに敬意を示し合い、

兄弟姉妹としてのつながりを持てるようにと祈った。そして「この地の献身的な聖徒らが聖なる神殿に参入できるようお祈りします」と続けた。

明けて10月25日、ファウスト長老夫妻、リンゼー長老夫妻はジンバブエ・ハラレ伝道部のバーン・マーブル伝道部長と妻のメアリー・フランシス・H・マーブル姉妹に迎えられた。地元200人以上の会員と求道者が、ファウスト長老によるジンバブエの地の奉献式に出席した。リンゼー長老は次のように述べている。「式の前、ジンバ



ブエの聖徒は雨を求めて断食をし祈っていました。ファウスト長老による奉獻の祈りが終わると雨がぼつぼつと降り始め、その後何日にもわたって降り続けました。」

ファウスト長老は祈りの中で「ジンバブエの地への祝福」を求め、「この地においてこれまで豊かであったものが引き続き豊かでありますように。……雨が降り川に水が豊かに流れますように。そして、民に与えられた大地が太陽の恵みを受けられますように。」

大きな川やカリバ湖、およびほかの湖の水が引き続き満ちますように」と祈った。

また、この度アフリカでは、コンゴ人民共和国が教会に対し、伝道活動を公式に承認した。リチャード・P・リンゼー長老はこれについて次のように述べている。「コンゴは、アフリカ大陸にさらに堅固な教会を打ち建てる、すばらしい機会を提供してくれるでしょう。教育の普及が困難なアフリカの多くの貧しい国々とは対照的に、コン

ゴでは成人の8割以上の人々が読み書きの能力を持っています。きっと教会にとって実り多い地となるでしょう。」

コンゴは、ケニア、ウガンダ、コートジボアール、ボツワナに次いで、アフリカで1991年に教会に対する公式の承認を与えた5番目の国となった。これらの国々ではすでに専任宣教師が働いており、教会は前進を続けている。（「チャーチニュース」1991年11月23日付、12月28日付）

南アフリカ女性議会、 末日聖徒を副議長に選出

南 アフリカ全国女性議会は、1991年11月4日、副議長として南アフリカ共和国ソウェト支部のジュリア・マービンベラ姉妹(73歳)を選出した。

黒人女性が議会副議長に選ばれたのは初めてのことである。今回のマービンベラ姉妹の選出は、ヨハネスバーグにおける全国女性議会に出席した白人会員の全員一致によるものであり、南

アフリカのアパルトヘイト政策撤廃後わずか2カ月足らずのことであった。

マービンベラ姉妹が教会員になったのは9年前で、以前に支部扶助協会会長の召しを果たし、現在は福音の教義クラスで教師を務めている。マービンベラ姉妹が自国の人々の先駆者となるのは今に始まったことではない。1930年後半に当時黒人女性としては数少ない教育の機会を得た姉妹は、トランス

バル州で黒人として初めて校長を務めた。

彼女は社会奉仕の面でも有名である。何年も前から女性の会や青少年団体を創設し、アフリカ全国女性議会トランスバル支部の支部長も務めてきた。また青少年やその両親に有機栽培を教え、玄関ほどの広さもない狭い土地での菜園作りを行なってきた。また1万5,000人のあらゆる人種の女性から成る機関「平和のための女性の会」の創始者、代表者のひとりでもある。

マービンベラ姉妹は、アフリカにおける教会員の奉仕を描いたビデオ「奉仕の人生」(英語版)にも出演している。（「チャーチニュース」1991年11月23日付）

ブリガム・ヤング大学コンピュータ講座、参加学生募集のお知らせ

ユ タ州プロボにあるブリガム・ヤング大学コンピュータ科学部では、優秀な高校生を対象に、大学レベルのコンピュータ講座の参加者を募集しています。受講期間は、1992年8月3日から14日までの2週間で、高校上級学習プログラムが全学費を負担します。

応募資格は以下のとおりです。

- 高校3年に在籍していること
- クラスの上位10パーセント以内の成績であること
- 英語が理解できること

受講者は、在学する高校の理数系科目の成績、および受講テストの得点により決定されます。(開講まで十分な

余裕をもって同大学の受講テストを受け、その成績を添付して応募できるようにしてください)コンピュータに関する経験は不要です。

2週間の講座修了者は、将来同大学に在籍した場合、当該科目2学期分の単位を取得したと見なされます。また講座の成績優秀者は、同大学コンピュータ科学部の、4,000ドルまたは5,000ドルの「ワードパーフェクト奨学金」への申請資格を得ます。

この講座が始まって今年で10年になります。今年度は、プロログ・プログラミング言語とエキスパートシステムについて学びます。

コンピュータ科学部のロバート・

P・バートン学部長は、この講座にはこれまで世界各国の学生が参加しており、大勢の受講生が同大学に入学している、と語っています。なお、講座受講のための旅費は自己負担です。

バートン教授は、「締め切り日は、特に指定されていないが、関心のある学生はできるだけ早く応募してほしい」と勧めています。

詳細については、下記にお問い合わせください。

AHSSP '92

Department of Computer Science
Brigham Young University
Provo, Utah 84602
U.S.A.

福音の原則を実践する ミューチャル

先ごろ、大管長会は教会の若い男性と若い女性が週日の夜に行なう活動「ミューチャル」の重要性を改めて強調した。ミューチャルは青少年が日曜日に学ぶ福音の原則を応用し、健全な活動を通してお互いを強め合い、指導力を養うことのできる場である。

以下の記事には、ミューチャルで行なえる活動、行なうべき活動の中央若い男性、若い女性会長会の見解が示されている。

また中央若い男性会長会会長のジャック・H・ゴーズリンド長老および中央若い女性会長会会長アーデス・G・カップ姉妹がミューチャルについて述べた話も掲載してある。

よく計画されたミューチャルは、若い男性や若い女性が日曜日に学んだ原則を実践する場となり得ると、ゴーズリンド長老とカップ姉妹は共に述べている。

「多くの青少年にとって、教会での経験といえば、教室の中か日曜日の集会など、ややかしこまったものに限られてしまいます。彼らには教会の会員であることは生活全体を意味する、ということを理解できるような経験が必要です」とカップ姉妹は説明した。

ゴーズリンド長老は加えて次のように述べた。「ミューチャルは日曜日のレッスンで学んだ福音を実践し、身につけるためのものです。日曜日の集会で学ぶだけでは十分とは言えません。私たちは福音を実践し、愛し、奉仕することを学ばなければなりません。」

先ごろ大管長会は福音の原則を実践するうえで、若い男性、若い女性の効果的な週日の活動の重要性を繰り返し述べた際に、このプログラムを再度強調した。ゴーズリンド長老とカップ姉

妹はチャーチニュースのインタビューの中で、ミューチャルのプログラムとそれが改めて強調されたことについて意見を述べている。

指導者への指示は「会報」1991年第2号に提示されている。「会報」には「ミューチャル」という言葉は週例の活動を意味すると記されている。

ゴーズリンド長老は次のように述べた。「重要なこととして、『会報』では、監督会の青少年委員会、ワード部若い男性-若い女性委員会および日曜日の午後の討論会の役割が強調されています。効果的なミューチャルを期待するならば目的をもって計画しなくてはなりません。そのためにもこれらの委員会が大切な役割を担っています。

目的のある活動とは、心に変化をもたらし改宗に導くものです。そのような心の変化こそ、私たちの目指すべきもののなのです。」

カップ姉妹もこれに続けて次のように語った。「目的は、青少年が福音の中で経験できる特別なものでなくてはなりません。彼らは学校で友達を作り、良い経験をすることはできます。しかしもし同じ価値観や標準を持つ人たちと共に経験を分かち合えれば、互いに励まし合える仲間となれます。そして共通の価値観や決意を持つ仲間としての意識が生じるのです。」

また指導者は青少年が異性とのグループ活動を計画するうえでも協力し、それによって青少年が互いに影響を及ぼすなら、人格形成期に健全な関係が築ける、とゴーズリンド長老は強調している。

「健全な環境の中で異性との接し方と互いに高め合うことを学ぶよう助けるなら、青少年はきっと後の人生に役立つ特質を身につけられると思いま



展示の視察を終えて、「ミューチャル」の概念について話し合うジャック・H・ゴーズリンド長老と、アーデス・G・カップ姉妹。

す」とゴーズリンド長老は語った。

カップ姉妹はこれに加えて次のように述べている。「ミューチャルの良い点のひとつは若い男性と若い女性に、デートという形式以外の状況で接する機会を提供できることだと思います。そしてそのような状況において彼らはデートのときのような制約を感じることなく、お互いに対して尊敬と感謝の念を持つことができます。」

ゴーズリンド長老はさらにこう述べている。「劇やダンスなど、このような関係を築くうえで有意義な活動を期待します。」

学校でほかの教会員と交わる機会の少ない地域では、ミューチャルの活動は特に重要な意味がある、とカップ姉妹は次のように付け加えている。

「彼らは教会堂に入ると安全な囲いの中にいるような気持ちになります。教会は彼らが受け入れられる所であり

共通の決意をした人々のいる所なのです。何も弁護する必要もなく、支持される所なのです。人格形成期にある青少年にとって家族以外のグループから安心感を得ることは重要なことです。」

中央会長会はミューチャルに時折両親が参加するよう計画し、若い男性や若い女性と、その両親との間に有意義な関係が築かれるよう願っている。ゴーズリンド長老は次のように説明している。「今、扉は開かれています。青少年と両親の結びつきをさらに強める必要があります。」

ミューチャルのそのほかの側面には、青少年が教会員でない友達を気軽に誘える場になるという点が挙げられます。」

またミューチャルは、青少年が奉仕する喜び、指導者としての責任を学ぶ場でもある。カップ姉妹は次のように述べている。「クラスや定員会で会長会を務めることの最も大切な点のひとつは、クラスの一人一人に対して責任を持つということだと思います。こうして責任感を身につけ、互いの幸福に対して関心と興味を抱くようになるのです。」

監督会の管理の下で、少なくとも月に1回、開会行事が行なわれる。青少年はこの場で司会や音楽を担当し、才能を伸ばすことができる。

「青少年が教会の青少年プログラムに参加し、そのプログラムが単なる娯楽にとどまらなければ、青少年は自分は価値があり、人の役に立ち、理解され、有能な人間である、と感じられるでしょう。」

もし彼らがこのような気持ちを抱くことができるならば、好ましくない環境に身を置いてまで認められたいとする願望を防ぐこともできるでしょう」とカップ姉妹は述べている。

ゴーズリンド長老もこれについて次のように述べている。「ここ数年、青少年を家庭からあまり遠ざけないようにという配慮から、週日の教会の活動は軽減されました。しかし実際には毎晩彼らを家にくぎ付けにしておくことはできません。」

私が若いころ、私の生活は教会中心でした。行くべきではない所に行く代わりに、私は教会で友達と交わってい



PHOTO COURTESY: LDS VISUAL RESOURCES

青少年は目的のある活動に参加することによって強められ、同時に奉仕の喜びや指導者としての責任感を身につけていく。

ました。現在、週日に車に乗ってあちこちの教会の前を通ると、明かりがっていないのに気づきます。日曜日と月曜日の夜以外は教会堂が暗くあつてはなりません。」

世界には距離の問題があつて、週日に集会を開くのがむずかしい地域もある。しかしそのような場合も、指導者や定員会およびクラスの会長会は、中央会長会の提案に添った活動を検討してみしてほしい、とゴーズリンド長老は述べている。

多くの青少年担当指導者から集会の頻度や内容についての質問が寄せられている。これに対してカップ姉妹は次のように勧めている。「もし監督会の青少年委員会がその主旨に添って機能していれば、各ワード部、支部の青少年の必要について考えるために集まって、『彼らにとって何が必要だろうか。それを満たすにはどうしたらよいだろうか』と検討してみることで。地元

の指導者は自らの管理の職について靈感を受けられるでしょう。」

活動はクラス会長会、定員会会長会および各々のアドバイザーを含む監督会の青少年委員会により計画される。そして、ワード部若い男性 若い女性委員会により計画が実施される、とカップ姉妹は説明している。

活動には、娯楽、スポーツ活動に加えて、奉仕活動、勉強会、将来の職業計画なども含まれる、とゴーズリンド長老は語っている。

「もちろん、プログラムから『楽しみ』を取り除こうとしているわけではありません。それは若い男性や若い女性の成長に欠かせない部分でもあります。もし青少年に奉仕活動だけをやらせよ

うとすれば、だれも参加しなくなることでしょう。」

カップ姉妹はさらにこう述べている。「スポーツは若い女性プログラムの重要な一部です。しかし、私たちが心配しているのは、スポーツに熱心なあまりほかの要素を排除して、スポーツばかりが活動となっているワード部のことです。プログラムのどの要素もおろそかにしてはならないのです。」

青少年には霊的成長と同様に肉体的、社会的、情緒的成長も必要です。彼らには年齢に見合った、均整のとれた経験が必要です。」

監督や支部長の重要な責任として、青少年を心にかけることが挙げられる。ゴーズリンド長老は次のように勧告している。「もし彼らが時間のないことを理由に、青少年に対する関心を失うならば、青少年自体を失う結果となります。」

ゴーズリンド長老とカップ姉妹は、1986年の女性の大会におけるエズラ・タフト・ベンソン大管長の以下の話を引用している。「監督の皆さん、若い男性および若い女性と親密な関係を保つようしてください。若い男性の活動と同じようにワード部の若い女性の活動にも注意を払ってください。若い女性のための活動やクラス、キャンプ活動や親睦会、ファイヤサイド、大会には若い男性のそれと同様に関心を向けるようしてください。若い女性確認の賞の授与についても、義務達成賞やイーグルスカウトのメダルの授与と同等の重要性を持たせてください。」(『教会の若い女性の皆さんに』「聖徒の道」1987年1月号, p.92。「チャーチニュース」1991年11月9日付)

青少年が福音を学び実践できるように助ける



PHOTO BY RUTH OREN

青少年の聖典学習を指導するアラスカ州アンカレッジ第10ワード部の若い女性会長のケイ・ショーガード姉妹。

- 強い信仰と福音への理解は人生の基となる。
- 信仰を深めるなら、力を得、奉仕したいという願いが生じる。
- 主を愛する青少年は自分自身と人々を愛し尊重する。

「さて見よ、われ^{なんじ}汝らに一つの^{いましめ}誠命^{あと}を与^あう。汝ら^{あいあつま}相集る時は、汝らの行〔う〕方法を知らんために互いに教え導くべし。」(教義と聖約43：8)

青少年の指導力を培う

- 監督会の青少年委員会、若い男性一若い女性委員会および各会長会の集会を通して、指導力が養成される。
- よく訓練された会長会はほかの青少年の良き指導者となる。



PHOTO BY JANET KRUGENBERG

ノースダコタ州ウォートン支部で行事を計画する監督会の青少年委員会。



PHOTO BY RAY STREIB

ロードラリーに参加し、共に楽しむアリゾナ州メサ・グランドビュー第2ワード部の青少年。

有意義な人間関係を築く

- 友情は大切。
- 青少年は互いが持っている能力や与えられる助けを尊重しなければならない。
- 恋愛感情とは違う、兄弟姉妹としての関係を育てる。

「汝の友だちは誠^{たす}に汝を援け、温き心と親しき手もて再び汝^{よろこ}を^{よろこ}び迎えん。」(教義と聖約121：9)



ユタ州ミッドウェーの山火事の跡始末をする、ユタ州ウエストジョーダン・マウンテンビューステーク部の青少年。

奉仕の機会を与える

奉仕はキリスト教の本質である。

- 人は仕える相手愛する。
- 青少年は奉仕を通して自らの価値を自覚する。

「またお前たちが^{ほらから}同胞のために務めるのは、ただお前たちの神のために務めるのである……。」
(モーサヤ 2 : 17)

お休み会員や教会員でない友達との交流の場

- ミューチャルの活動はだれにとっても有益。
- お休み会員、教会員でない青少年が容易に溶け込める。
- 健全で、安全な、精神を高揚させる環境。



カナダ・アルバータ州メジシンハット第1ワード部のアドバイザー、ジェーン・ヘール(左)、ダニエル・マクニーベン(右)、アリシア・ワイルドと共に働く。アリシアは教会員ではない。

人生への備え



コロラド州立大学で工学実験室を見学する、コロラド州リバーサイドワード部の青少年。

- 学校やそのほかの活動でも優秀な成績を収めるように励ましを受ける。
- 重要な決定について両親、指導者と相談する。
- 神殿の儀式が受けられるよう備える。
- 結婚や家庭生活に自らを備える。
- 将来の職業について考える。
- 成熟した、内面豊かな人物になる。

「われ誠に汝らに告ぐ、大いなる事汝らを待つ。」
(教義と聖約45 : 62)

家族の証

10年後の改宗

横浜ステーキ部上大岡ワード部
栗原 薫



13年前、私は会社の研修旅行でアメリカ西海岸へ行くことになりました。ところが突然会社から電話が入り、「予定の航空会社がストを行ない、いくつかの航空会社の飛行機に分散して乗ることになったので30人に1日早く出発してもらおう。ついてはひとり誘ってこの条件で出発してほしい」と言うのです。私は特別な意図もなく、同じ横浜市内に住んで前々から同じ仕事をしているひとりの男性に電話をして、同じ飛行機で出発することになりました。アメリカまでの約8時間、機内では彼と隣り合わせの席になりました。目的地に着くまでに何回となくコー

ヒー、紅茶のサービスがありますが、彼はその都度断わり、ジュースや水を飲んでいました。不思議に思って尋ねてみると、返ってきた答えはなんと、教会の話でした。ほかに何もすることのない飛行機の中です。彼は次から次へと途切れることもなく教会の話続けました。その終わりを知らない様子に、しまった、コーヒーぐらいのことで聞かなければよかったと後悔しました。でも窓側に座っていた私は逃げることも席を変えることもできず、とても困りました。寝た振りさえしました。でも話は泉のごとくあふれ出します。言葉は耳を素通りしていきましたが、

ただ何回も繰り返し使われていたモルモンの本、ジョセフ・スミスという言葉だけは妙に頭に残りました。

9日間の研修を終え、楽しい思い出話やたくさんのお土産を持って再び飛行機に乗ると、隣の席にはにこにここと彼が座ります。驚いて座席番号を確認しましたが、間違いありません。がっかり来て、力が抜ける思いでした。例によって再び教会の話は延々と続きます。それだけではありません。なんと帰国したら教会に行く約束までする羽目になってしまいました。まだまだ続きそうな話を打ち切りをしたい一心で、適当に返事をしてしまったのです。

帰国後、約束は簡単にするものではないと後悔しました。でも約束は約束です。ある日、6歳と8歳の娘を連れて横浜ステーキ部センターのある教会に行きました。1回行けば約束を果たすのだからと、義理で足を運んだまででした。集会も終わって帰ろうとしたところ、彼の奥さんから「おにぎりでもご一緒にいかがですか」と、とてもやさしく誘われました。お昼はとうに過ぎて、おなかはとてもすいています。おにぎりを食べたかったのですが、もしここで食べたなら教会に入らなければならなくなると思い、娘たちの手を引っ張って逃げるようにして帰りました。

それから10年が過ぎました。ある日会社の会議で久しぶりにあのときの兄弟と会いました。娘の進学のことを話すと、ブリガム・ヤング大学や教会の英会話について教えてくれました。教会員でなくても英会話に行ってもよいと知りました。娘たちに話すと、ぜひ行きたいと言うので、その兄弟の所属している横浜駅の近くの教会に連れて行ってもらいました。

2, 3回ほど行ったときに、長女が英会話の後で教会のことも学びたいと言いつし、宣教師から話を聞き始めました。娘たちを毎回車で教会に送迎していた私は、終わるまで別段することもなく、次第にどんな話をしているのか知りたくなり、同席してみることにしました。宣教師は一生懸命に娘に福音を説いています。その純粋な目、純粋な心、それでいて情熱の込められた語り口。なぜ私たち日本人のためにわざわざ故郷を離れ、遠い日本に来てこのように尽くすのだろうか。私には不可解でした。こんなことを考えていると

次の約束が待ち遠しくなりました。話の内容そのものではなく、彼らの表情や態度を観察して、答えを見いだそうと思ったからです。宣教師は50歳を過ぎた私に、理解できないことを何度も何度も教え、わけもわからぬ質問にもいやな顔ひとつせず一生懸命に答えてくれました。

やがて少しずつ理解できるようになった私は、それまでの自分の考え方の愚かさを恥じ、感謝の気持ちでいっぱいになりました。あるとき、私の背後から、強い日差しが宣教師の方たちに注ぎました。太陽の光の中でまぶしく輝く宣教師の姿は、50年生きてきて初めて見た美しさで、今でもまぶたに焼きついています。

そのときから私は福音を真剣に学び始めました。長女は初めからバプテスマを受けるつもりでした。次女は、自分の意志で決めるから強要しないでほしいと言いました。宣教師との集会が重なるにつれて教会に入りたいという3人の気持ちが固くなっていき、バプテスマの日が決められました。その陰

には、宣教師が転任する前にバプテスマを、という教会を紹介してくれたあの兄弟の配慮もあったようでした。

こうして迎えた1989年1月29日の私たち3人のバプテスマ会はとてもすばらしく、生涯忘れられるものではありません。それまで英会話などでお世話になったワード部や、改宗後私たちが集うことになるワード部から、大変多くの方が出席してくださいました。特に、その日のために断食をしていた宣教師には頭が下がり、涙が出るほどうれしく思いました。感無量でした。

でもいつも心に残るのは、教会員でない主人のことでした。頑固な主人だけど、何とか教会員になってほしい。私たち3人はこの願いを込めて夫に働きかけるようになりました。

生活の中で何かの話から教会のことが話題に上ると、すかさず娘たちが、私たちの結婚式にはお父さんは出席できない、神殿のロビーで待っていることになるのよ、と脅してみたり、またあるときはおだてたりしました。やがて姉妹宣教師が家を訪れるようになり、

栗原ご家族



夫もだんだん打ち解けて話をするようになりました。宣教師の方から「お父さんに福音を伝えましょう」と言われたとき、私はまだ早いと思いましたが、娘は、これはチャンスかもしれないと言ったので協力し合って宣教師を手助けして、夫は福音を学ぶようになりました。実際、姉妹宣教師の方の熱心さやさしさを、親切な心は夫の頑固な心を解きほぐしてくれました。

私たちの改宗から数えて11カ月後、夫はバプテスマを受け、その約1年後、おかげさまで家族の結び固めの儀式も受けることができました。これで私たちは本当の教会員、モルモンの家族になれたような気がします。私は改宗して半年ほどしたとき、教会員になって初めて、13年ほど前におにぎりをお断りして逃げるようにして帰ったあの教会堂で行なわれた集会に出席しました。証をしながらひとつの席が目にとまり、あのときはこの席に座ったのだと、まるで昨日のことのように鮮明に思い出しました。

教会員になってからは、枚挙にいとまがないほど神様から祝福をいただき、こんなにいただいているのかしらと思うほどです。主人は定年を過ぎてもそのまま仕事を続けることができ、長女は現在専任宣教師として名古屋伝道部で伝道しています。次女は伝道に出るべく準備を進めています。また私は、神殿で奉仕をする責任をいただいております、毎日毎日が夢のようです。初めのうちは、10年前に受け入れていたならいろいろな知識を身につけられたのに、と勝手なことを思い悔やみましたが、今では改宗するにはやはり時期があったのだらうと思っています。私たちを教えてくれた宣教師の方たちが、私たちのために神様より準備されて来られた方だと思います。今では愛と忍耐をもって真実の教会に導いてくれたあの兄弟にも心から感謝しています。家族全員が教会員になって毎日幸せに過ごせることを心より神様に感謝しております。(くりはら・かおる ワード部 扶助協会教育担当副会長)

り、父は少しずつ彼女たちと話をするようになり、いつの間にか神様の話に引き寄せられていったようでした。姉がハワイに行ってから、とても寂しそうにしていた父も姉妹宣教師が家に遊びに来て、神様の話をする度に明るく、うれしそうに見えました。また、父が初めて教会に足を運んだときには、上大岡ワード部の兄弟姉妹の笑顔と歓迎に、大変温かいものを感じたと話していました。

ある日、私が学校へ行っている間に、父は自分で灰皿、たばこ、お酒をすべて処分してしまいました。まさかと思いました、その日から父は知恵の言葉に反するものをすべて断ったのです。私たちはとても喜びました。しかし、40年近くも飲酒と喫煙を続けてきた父にとっては、すべてを一度に断つのは容易なことではありませんでした。見る見るうちに父の顔中にできものができ、目は開けられないほど膨れあがって、具合が悪くなり、とても見てはもらえぬ姿でした。「お父さん、もういいよ、お父さんの好きにしていればいいから、これ以上苦しめないで。」私はたまらずこう言ってしまいましたが、父は答えて言いました。「お父さんは頑張るよ、だって、神殿で永遠の家族になりたいから。」そのときの父の言葉は今でもはっきりと覚えています。「永遠。」すべてがこの言葉に支えられているかのような様子でした。そしてこの支えと神様の導きにより、同じ年の12月24日、父はバプテスマを受けました。

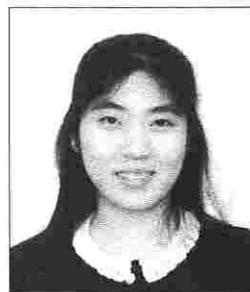
末日聖徒の家族として一步を踏み出した私たちにとって、何もかもが初めてのことばかりでしたが、同じ末日聖徒の家族の人たちの助けでここまで来れた気がします。

昨年1月26日、父は大神権をいただき、2月1日に東京神殿において家族の永遠の結び固めの儀式を受けることができました。神殿に入った途端、神様のとても大きな愛に包まれて、とても平安な気持ちになりました。「2年前まではこの教会のすばらしい教えを知ることもなく、1年前は父が改宗することは夢のまた夢だった。でも神様はすべて計画してくださっていたのだ。」

家族の結び固めの儀式が終わった帰

神様からの贈り物

横浜ステーキ部上大岡ワード部
栗原未果



神様からのすてきな贈り物は、突然の電話によって始まりました。「栗原姉妹のお父さんに神様のことをお話ししたいのですが。」初めは戸惑いましたが、姉妹宣教師の熱心さにすべてを任せることにしました。

母と姉と私は、1989年1月29日に各々の信仰と証によりバプテスマを受けました。そのころ父は私たちがバプテスマを受けたことについて何も言いませんでしたが、目の前で神様のこと

を話されると、あまりいい顔をしませんでした。やがて姉はブリガム・ヤング大学ハワイ校に行きました。

初めは早く神様のもとへ父を導きたいと焦っていましたが、姉がいなくなったせいか、いつもの調子で父に話をするのができなくなりました。母と私は、「お父さんを教会員にするための10年計画」を立て、焦らず導かれるままに、とっていました。

そのころ、姉妹宣教師から電話があ

り道、父が「お父さんは60年以上生きてきて、初めて素直に涙を流すことができたよ。初めて笑顔でいることができたよ。そして初めて神様の愛のすばらしさがわかったよ」と言ったとき、私たちはもう何も言うことができませんでした。

そんな私たち家族にも、試練が待ち構えていました。

姉が昨年3月に伝道に出て6カ月目になろうとしたときでした。数カ月前から寝たきりだった祖父が亡くなったのです。2日前から親族が呼ばれたりしていましたが、7月12日、大きな息を3回して、そのまま亡くなりました。母と私がほんの少し出かけたすきのことでした。祖父の体に触り、まだ温かいからと言って泣いている母の姿も、つらくて見ていられないほどでした。

通夜は2日後になりました。その間私たち家族は、ひとつの大きな問題をどうするか話し合っていました。それは姉に祖父の死を伝えるかどうかです。結局家族の間で隠し事はよくないという結論になり、伝道部長を通して伝えることに決まりました。

心配したとおり、特別に許可をもらった姉から祖母の家に電話がありました。葬式の準備などで祖母の家に詰めていた母が出ましたが、何を言っても姉は泣いているだけで、「帰る」の一点張りです。私たちにとっては初めての出来事に、姉の言うとおりにそれを受け入れてもいいのかどうか迷ってしまいました。けれども、以前伝道部長を務めた経験のある兄弟から、途中で帰るのは姉にとって最善の策ではないと助言を受けていたとおり、なるべく帰って来ないようにと説得に務めました。しかし姉も感情的になっていたので、話もうまくかみ合いません。

困っている母から受話器を取ったのは祖母でした。「由果、悲しいのはよくわかる。私もとても悲しいから。でもね、由果は今伝道に出ているんですよ。おばあちゃんは9月に由果が伝道を終えて帰ってくるのを楽しみに待っているからね。今は苦しいだろうけど、頑張りなさい。それがおじいちゃんの一歩の供養になるんだからね。」福音を知らない祖母の語る一つ一つの言葉

に、神様のみこころが現われているかのようなのでした。

姉は一度電話を切り、伝道部長や同僚と祈った後、再び電話をかけてきました。そして今度はしっかりした声で「伝道頑張る」と言ったのです。

祖父の葬式もすべて無事終わり、少しづつまたいつものペースが戻ってきたころ、祖母から電話がありました。あの日から姉は毎週祖母に手紙を書いていたのです。その一番最後にはいつも「私が帰ったら、おばあちゃんにとってもすばらしいメッセージがあるから楽しみにしていて」と書いてあるそう

永遠の家族を目指して

横浜ステークス部上大岡ワード部
栗原民夫



妻 や娘たちが教会に入るとき、私は初めてこの教会について知りました。しかし、私には興味はなく、妻子の信じるものに特別反対はしませんでした。

ある日、家に姉妹宣教師が遊びに来ました。彼女たちが来るのは初めてではありませんでしたが、私に会うのは初めてでした。一緒に食事をし、教会についてはそれほど触れませんでした。何回か遊びに来て話をしているうちに、気がついてみると話題はいつも神様や教会のことになっていました。それからというもの彼女たちから福音を学ぶ日が待ち遠しく感じるようになりました。ちょうど長女がプリガム・ヤング大学ハワイ校に留学しており、姉妹宣教師がまるで娘のように見えたのでした。

そのころ次女が教会に入って初めて聖餐会せいさんかいで話をするこゝになり、たまた

です。祖母は私に「何を話してくれるんだろう。メッセージってどんなことかな」と尋ねますが、私はただ、「さあ、姉さんが言うことだからきつとすごくいことだよ」と言うだけです。

距離的には遠く離れた姉が、心理的には一番近い存在として、祖母に福音を伝える準備をしています。祖父も霊界で福音を聞いているかもしれません。祖父の死を通して私たち家族がもっと強く結ばれ、福音を宣べ伝える大切さを教えられたことに感謝しています。(くりはら・みか 扶助協会教師)

ま仕事が休みだったことも相まって、私は娘の話をする姿を見に教会へ行ってみることにしました。初めて教会堂に足を踏み入れたとき、ほほえみを浮かべた見ず知らずの人々から握手を求められ、非常に驚いた反面、とてもうれしかったのを覚えています。

後ろの方の席に座って娘の話を聞いていると、ふと、ある話を思い出しました。娘が神殿で結婚するときには、式に参列できるのは教会員だけであり、私はというとロビーで待っていなければならないということでした。今こうして娘の話す姿を目にしているように、ここまで成長した娘の晴れの結婚式に立ち会えないなんて、こんなつらいことがあるだろうか。

何日か後、再び宣教師から福音を学んでいるとき、知恵の言葉について聞きました。私にはとてもできない。もう40年も続けてきたのに、どうして今

さら好きな酒やたばこがやめられようか。そのとき、一瞬こんな考えが頭をよぎりました。でも娘の結婚式には参列したい。酒、たばこをやめさえすれば、ロビーで待つことなく、堂々と結婚式に出席できるのだ。

しかし実際に行動に移すのは大変でした。長年好んでいたものを急にやめるとなると、精神的にいらいらし、とにかく苦しくなりました。体の方も、顔に吹き出物ができ、目がはれあがってしまいました。最初の1、2週間が一番苦しい思いをしました。どうして自分はこんなことをしているんだろう、なぜこんなに苦しまなければならないんだろう。しかし考えはいつも娘の結婚式に出たいというところに戻ってきました。この苦しみはだれにも代わってもらえません。ひたすら自分自身の意志との闘いでした。

そのうちに私のバプテスマの日が決まりました。もう頑張るしかありません。姉妹宣教師や娘、教会員の方々も応援してくれました。一番心の支えになったのは、やはり妻でした。教会員になれば妻と永遠の結婚ができ、家族と永遠の結び固めもできる。たとえ今つらくても神様はそれを知ってくださっており、この苦しみを乗り越えたとき、本当にすばらしい祝福が与えられる。

毎日こんな闘いを繰り返し、ついに私のバプテスマの日、12月24日が来ました。その日は安息日で、横浜ステーキ部センターで大バプテスマ会が計画されていましたが、私はあえて家族がバプテスマを受けた家の近くの教会で受けることにしました。妻が開会の祈りを捧げ、長女の由果が賛美歌の指揮をし、次女の末果が証をしました。家族がこのように団結してひとつのことを成し遂げるのは本当に久しぶりでした。最初に妻に福音を伝えてくれた兄弟の息子さんからバプテスマを、そしてその兄弟自身からかんしんり按手札を受けました。

教会員として家族が一步一步共に歩いて行くにつれて、少しずつ少しずつ祝福が与えられているのがわかります。昨年3月に入り、長女が伝道に出て、日本宣教師訓練センターから、名古屋

に向かいました。私があこのふたりの姉妹宣教師に出会ったように、今ごろ娘もだれかにこのすばらしい福音を伝えているのかと思うと、胸が熱くなる思いです。そして娘が帰ってきたら一緒に神様のことについて話したいというのが、今の私の夢であり楽しみでもあります。

父の愛に支えられて

名古屋伝道部専任宣教師
栗原由果



「伝道には出たくない。1年半奉仕する余裕なんか私にはない。」今から2年半前、私はそう思っていました。その年のクリスマスイブ、父はバプテスマを受けました。お酒とたばこが大好きだった父。よもやそのふたつをやめることはあるまいと思っていたその父が、永遠の家族を築きたい一心で一切を断って、一生懸命戒めを守る努力をしたのです。父が純粋に、どれほど深い愛を家族に注いでくれたのかをまざまざと知らされました。父の愛に、私は幸せな気持ちでいっぱいでした。

父は、私が初めて身近で見た改宗者でした。人が改宗するとき、本人だけでなく、その周囲の人も幸せになれる。こう感じた私は、伝道に出ることを真剣に考えるようになりました。

私が名古屋伝道部への召しを受け、日本宣教師訓練センターに入っていたとき、妹から1通の手紙を受け取りました。その中には、私が伝道に出た後、聖餐会で父が話した内容が少し書いてありました。「私に教えてくれた姉妹宣教師たちのように、由果にも頑張ってもらいたいです。」普段あまり父とまじめに話したことのなかった私には、父

ります。

今では神様の愛も感じ、神様が生きおられることを確信しています。これから何があるかわかりませんが、どんなときも、いつも家族が団結して頑張っていきたいと思っています。(くりはら・たみお 歓迎委員)

の心の中まではとてもわかりませんでした。けれどもこの手紙を見たときは涙が止まりませんでした。口数の少ない父ですが、しっかりと家族を、そして私を支えてくれていると確信し、とても心強く感じました。

毎日伝道していて、たくさんの人に神様のメッセージを伝えるとき、天のお父様がどれだけ私たちに愛を注いでくださっているかを知ることができません。天父の愛は目には見えません。しかし祈りに答えて、人を通して、神様は助けてくださっています。伝道は神様のみ業です。それを行なうとき神様は家族にたくさん祝福を与えてくださいます。伝道に出たころは家にいる家族が心配でしたが、家族や周りの人々からもう手紙を読んでいるうちに、そんな心配は吹き飛んでしまいました。本当に感謝しています。神様の子供たちに福音を宣べ伝えられることを感謝しています。彼らは永遠の友達です。伝道の経験を通して成長できるとともに、家族がいつも私を支え助けてくれることに心から感謝しています。(くりはら・ゆか 横浜ステーキ部上大岡ワード部出身)



2月に 召された 専任宣教師

第152期生 8人

後列左から1-6, 前列左から7-8

〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 島崎 菜々子	松山 D / 高知 B	大阪伝道部
2. 吉村 裕子	新潟 D / 新潟 B	名古屋伝道部
3. 溝口 松子	福岡 S / 佐賀 B	名古屋伝道部
4. 利田 純子	札幌 S / 札幌東 W	名古屋伝道部
5. 沢川 由佳	富山 D / 高岡 B	仙台伝道部
6. 大谷 恭子	横浜 S / 上大岡 W	福岡伝道部
7. 佐瀬 真二	町田 S / 町田第2 W	大阪伝道部
8. 藤原 歩	大阪北 S / 京都洛北 W	仙台伝道部

S:ステーキ部, D:地方部, W:ワード部, B:支部

編集室から

皆さんの原稿を募集しています

▶ローカルページでは皆さんの原稿を募集しています。改宗談や日々の生活で得た証(仕事にかかわる証など), 本誌を読まれての感想文などをお送りください。

▶これまでローカルページでは証の著者の生年を記載しておりましたが、今

後は記載しないことになりました。ただし編集作業の参考のため、投稿の際には従来どおり連絡先(電話番号), 教会での責任(役職名)に併せ、生年を記入してお送りください。

▶お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また、

掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますのであらかじめご了承ください。

▶あて先: 〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室

☎03(5489)9251